

Rapid Recovery 6.1.2 リリースノート

2017年6月

これらのリリースノートは、Rapid Recovery リリース、ビルド 6.1.2.115 に関する情報を提供します。

次のトピックで構成されています。

- [このリリースについて](#)
- [Rapid Recovery のリリース表記](#)
- [改良点](#)
- [このリリースで使用できなくなる機能](#)
- [解決した問題](#)
- [既知の問題](#)
- [Rapid Recovery のシステム要件](#)
- [製品ライセンス](#)
- [Rapid Recovery を初めてご利用になる方へ](#)
- [補足資料](#)
- [各国語対応](#)
- [Quest について](#)

このリリースについて

Rapid Recovery ソフトウェアは、社内またはリモートに配置された VM および物理サーバの高速なバックアップと検証機能付きのリカバリを実現します。Rapid Recovery は、低価格で使いやすく豊富な機能を備えたバックアップ、レプリケーション、およびリカバリソリューションを必要とする IT プロフェッショナル向けに開発されたソフトウェア製品です。Rapid Recovery を使用して、Microsoft SQL Server、Microsoft Exchange、および Microsoft SharePoint などのサーバおよび基幹業務アプリケーションを保護できます。Rapid Recovery を使用すると、単一の Web ベースの管理コンソールから、すべての重要なデータとアプリケーションを継続的にバックアップし保護することができます。

Rapid Recovery 6.1.2 はメンテナンスリリースであるため、[機能拡張](#) および [不具合の修正](#) の記載は、このリリース固有のものに限られます。累積されて記載されているのは [既知の問題](#) のみです。新機能、拡張された機能、解決した問題、既知の問題、または他のリリースのコンポーネントの変更の詳細については、該当するバージョンの Rapid Recovery リリースノートを弊社の [技術マニュアル](#) のサイトで参照してください。たとえば、次のとおりです。

- 最新のメジャーリリースである Rapid Recovery 6.0 に固有の情報を確認するには、『[Rapid Recovery 6.0.1 Release Notes](#)』（Rapid Recovery 6.0.1 リリースノート）を参照してください。
- 最新のマイナーリリースである Rapid Recovery 6.1 に固有の情報を確認するには、『[Rapid Recovery 6.1 Release Notes](#)』（Rapid Recovery 6.1 リリースノート）を参照してください。
- 前回の最新メンテナンスリリースである Rapid Recovery 6.1.1 に固有の情報を確認するには、『[Rapid Recovery 6.1.1 Release Notes](#)』（Rapid Recovery 6.1.1 リリースノート）を参照してください。



NOTE: [技術マニュアル](#) のサイトのデフォルトビューに、一般提供されている最新バージョンの Rapid Recovery ソフトウェアのマニュアルが示されています。ページ上部のフィルタを使用すると、別のソフトウェアリリースのマニュアルや、Quest DL シリーズのバックアップおよびリカバリアプライアンスのマニュアルを表示することができます。また、ガイドの項目別にビューをフィルタすることもできます。

ブランド名変更

リリース 6.1.2 の Rapid Recovery 製品およびマニュアルでは、Quest Software ブランドを反映するように、ブランド名が完全に変更されています。Quest の詳細については、「[Quest について](#)」を参照してください。

リリース 6.0x より前のリリースでは、Rapid Recovery の名前は AppAssure でした。製品のすべてのコンポーネントは、進化の次の段階を反映するために、ブランド名が変更されました。詳細な情報は、「[Rebranded components](#)」(ブランド名が変更されたコンポーネント)のトピック(『[Rapid Recovery 6.0.1 Release Notes](#)」(Rapid Recovery 6.0.1 リリースノート))に記載されています。

リポジトリのアップグレードに関する注意事項

Core ソフトウェアを任意の旧バージョン (Rapid Recovery 6.0x、AppAssure 5.x など) からリリース 6.1.x にアップグレードすると、リポジトリ内のスキーマが変更されます。このアップデートでは、各ゲストに Rapid Recovery Agent をインストールしなくても Microsoft Hyper-V ホストでゲストを保護できるなど、最新リリースの新機能を使用できるようになります。

アップグレード中にリポジトリの構造を変更した後、Core のバージョンをダウングレードすることはできません。このリリースにアップグレードした後で、以前のバージョンを使用したくなる可能性がある場合は、リポジトリにデータをアーカイブしておく必要があります。この操作によって、後で情報を手動で再インポートできますが、非常に手間のかかる作業になる場合があります。

システム要件マニュアルに関する注意事項

弊社では、各ソフトウェアリリースについて、Rapid Recovery ソフトウェアとコンポーネントのシステム要件を見直し、アップデートしています。ローカライズバージョンの製品マニュアルを使用している場合、最新のシステム要件に関するリリースノートを参照してください。リリースノートは、リリースサイクルでときどきアップデートされ、再発行されます。

Rapid Recovery のリリース表記

Rapid Recovery のリリース表記は、4 つの部分で構成されています。各部分は、小数点によって区切られた数字のセットで構成されます。

- メジャーリリースは、最初の数字によって指定されます。これらのリリースには、UI、リポジトリ、またはアプリケーションの動作の大幅な変更が含まれます。
- マイナーリリースは、最初的小数点の後の 2 番目の数字によって指定されます。マイナーリリースでは、メジャーリリースに含まれる変更のタイプよりも範囲が小さい新機能を導入します。
- メンテナンスリリースは、2 番目の小数点の後の 3 番目の数字によって指定されます。この時点および将来のリリース番号に関して 3 番目の数字が 0 より大きい場合、メンテナンスリリースです。メンテナンスリリースでは、以前に特定された不具合や動作を修正しています。
- ビルド番号 (通常は 3 桁または 4 桁) は、4 番目の数字のセットによって指定されます。この部分は、開発プロセス中に生成されたソフトウェアプログラムのバージョンを区別するために使用されます。
 - Rapid Recovery Agent ソフトウェアでは、Windows バージョンと Linux バージョンでビルド番号が異なる場合があります。リリース番号の最初の 3 つの部分が同じである場合、異なるビルド番号の Core と Agent の相互運用性は影響を受けません。
 - リリースサイクル内で、同じソフトウェアリリースの更新されたビルドが、ライセンスポータルで提供される場合があります。そのため、お使いの Core が、保護対象マシン上の Agent バージョンを自動的に更新するように設定されている場合、1 つのリリースでもビルド番号が異なる場合があります。これらの違いは、機能に悪影響を与えません。
 - Core のソフトウェアのみのバージョンと、Quest DL シリーズのバックアップおよびリカバリアプライアンスで使用されるバージョンの間でも、ビルド番号が異なっている場合があります。
 - ビルド番号は、Core コンポーネントと Add-on for Kaseya コンポーネントとで異なります。
 - ビルド番号の違いはレプリケーションに影響しません。

リリース 6.1.2.115 の場合、最初の数字 (6) はメジャーリリースです。2 番目の数字 (1) はマイナーリリースを表します。3 番目の数字 (2) は、これが 6.1 の 2 番目のメンテナンスリリースであり、不具合の修正を含むことを示します。この場合、メンテナンスリリースには Quest のブランド名変更も含まれます。最後の数字は (115) はビルド番号で、一般的にリリースノートでのみ参照されます。このリリースのビルド番号は、Core、Windows Agent、Linux Agent、および Local Mount Utility などのコンポーネントで同じです。

改良点

本項には、Rapid Recovery リリース 6.1.2 で実装された拡張機能、または技術製品マニュアルでこれまでに説明されていなかった拡張機能が記載されています。

次のトピックで構成されています。

- サポート対象のその他の Linux ディストリビューション
- Exchange Server 2016 DAG のサポート
- vSphere/ESXi 6.5 の限定サポート

サポート対象のその他の Linux ディストリビューション

Rapid Recovery リリース 6.1.2 には、Rapid Recovery Agent のサポートを CentOS、Red Hat Enterprise Linux (RHEL)、および Oracle Linux のバージョン 7.3 に拡張する、ネットワークブロックデバイス (NBD) 実装へのアップデートが含まれています。

これら 3 つの Linux オペレーティングシステムは、サードパーティ製コンポーネントである NBD に依存して、TCP/IP ネットワーク経由の、固定サイズのブロックによるデータの読み取りと書き込みをサポートします。Rapid Recovery Agent でサポートされるその他の Linux ディストリビューションでは、カーネルに NBD が含まれています。

Exchange Server 2016 DAG のサポート

Rapid Recovery は、Exchange Server 2016 DAG クラスタをサポートするようになりました。アプリケーションおよびクラスタ構成が Rapid Recovery のリリース 6.1.1 とリリース 6.1.2 でテストされ、両リリースのソフトウェアと互換性があることが確認されています。

vSphere/ESXi 6.5 の限定サポート

リリース 6.1 以降、Rapid Recovery は vSphere/ESXi 6.5 の限定サポートを提供しています。特に記載がない限り、ESXi 6 でサポートされる機能は、現在 ESXi 6.5 でも機能します。詳細については、以下を注意してお読みください。

次の機能がサポートされています。

- ESXi 6.5 での仮想マシンの保護
- ESXi 6.5 からのリカバリポイントのレプリケーション
- ESXi 6.5 へのリカバリポイントの仮想エクスポート

次の制限が存在します。

- ソースマシンでセキュアブートオプションを使用している場合は、仮想マシンを vCenter/ESXi 6.5 にエクスポートすることはできません。
- ESXi 6.5 上で仮想マシンをエージェントレスで保護している場合、暗号化された VM を保護することはできません。これには、VDDK 6.5 が必要です。この制限は、VM に Agent ソフトウェアがインストールされている場合は適用されません。この機能のサポートは、VDDK 6.5 へのアップグレードが含まれる Rapid Recovery リリース 7.0.0 以降で導入される予定です。
- ESXi 6.5 上で仮想マシンをエージェントレスで保護しているときに、転送モードが SAN (ストレージエリアネットワーク) に設定されている場合、転送は機能しません。SAN 転送モードオプションは、エージェントレスの保護でのみ使用できます。

一般的に、ESXi 6.5 に固有の新機能は、Rapid Recovery の将来のリリースで VDDK が更新されテストされるまで、機能せずサポートされません。

このリリースで使用できなくなる機能

本項には、Rapid Recovery リリース 6.1.2 で使用できなくなる機能、アイテム、または関連コンポーネントのリストが記載されています。

次のトピックで構成されています。

- [Microsoft Exchange Server 2007 SP1 ロールアップ 5 の廃止](#)

Microsoft Exchange Server 2007 SP1 ロールアップ 5 の廃止

Microsoft は、サポートライフサイクルポリシーに基づいて、2017 年 4 月 11 日に Exchange Server 2007 の拡張サポートを終了しました。

Quest は、Exchange Server 2007 SP1 ロールアップ 5 を Rapid Recovery リリース 6.1.2 でテスト済みであり、問題は検出されていません。このため、リリース 6.1.2 のサポート契約をお持ちのお客様には、このバージョンの Exchange Server の限定サポートが提供されます。このバージョンの Exchange を Rapid Recovery 7.0.0 でテストすることも計画されており、リリース 7.0.0 でもサポートが提供される予定です。

ただし、このバージョンの Exchange Server は廃止されたため、今後リリースされるバージョンの Rapid Recovery のサポートは打ち切られる予定です。Rapid Recovery を使用して Exchange Server 2007 SP1 のバックアップを行っているお客様は、Microsoft でサポートされているバージョンの Exchange Server にアップデートするよう計画および実装することをお勧めします。

解決した問題

このリリースで解決された、お客様に発生した問題は次のとおりです。

表 1. Core および Windows の解決済みの問題

解決した問題の説明	問題 ID	機能エリア
Windows Server 2012 R2 または Windows Server 2016 を実行しているマシンで、Agent ソフトウェアのバージョン 5.4.3 または 6.0.x をアップグレードした後に、増分スナップショットではなくベースイメージが取得されていました。	102561	アップグレード

解決した問題の説明	問題 ID	機能エリア
レプリケーション障害が発生した場合、障害の発生時点より前に正常にレプリケートされたデータは、ステージエリア (ターゲット) から消去されるため、次のレプリケーションジョブを障害が発生したポイントから再開するのではなく、最初からもう一度開始しなければなりません。	102578	レプリケーション
ReFS ファイルシステムを使用しているボリュームのマウントが、Windows Server 2016 で機能しませんでした。	102437	マウント
DVM リポジトリの特定のシーケンスで同じスナップショットの削除を 2 回以上リクエストすると、データの不整合が生じることがあり、Core のログが次のエラーによりスパムされていました。「unmanagedDvm.storageSubsystem.」	102286	リポジトリ
ホワイトラベルを実装した後、エージェントレスで保護された VM のボリューム ページが空になっていました。	101891	ボリューム ページ
大規模なデータベースを含む保護対象の Exchange サーバまたは高負荷のサーバに対するマウント可否チェックの実行時、子ジョブ間にギャップが生じることがあり、これによってサーバのパフォーマンスが低下して、一部のチェックジョブが数時間も続いていました。	101797	Exchange サーバのチェック
レポート PowerShell スクリプトが、リファクタリングの実行中、契約の再配置のために実行されませんでした。これを解決するようにコードが更新されました。	101678	PowerShell
Arcserve Unified Data Protection ソフトウェアは互換性のない製品として認識されていませんでした。	35798	検証
新規アカウントの追加 ダイアログに、S3 互換クラウドアカウントのサービス エンドポイントを入力する領域がありませんでした。	35736	アーカイブ
Amazon へのアーカイブが失敗し、次のエラーが表示されました。「指定した承認メカニズムはサポートされていません。オハイオ、ムンバイ、およびソウルリージョンのバケットには AWS4-HMAC-SHA256 を使用してください」	35733	アーカイブ
レプリケーションスケジュール設定の韓国語訳が正しくありませんでした。	35726	国際化、レプリケーション
韓国語口ケールの 暗号化キー ページにある「状態」列の翻訳が正しくありませんでした。	35716	国際化、暗号化
Rapid Recovery ソフトウェア開発キットで、AppRecoveryAPI サンプルの AddClusterUnderProtectionSample が機能しませんでした。	35694	SDK
仮想エクスポートが失敗し、特定のステップの後、次のエラーが表示されました。「クラスタオフセット '19626746' クラスタ長 '520' に物理的エクステンタが見つかりません。」 エクステンタディスク番号 「1」 LCL 「19627264」 LCF 「0」 PSF 「264192」	35626	VM エクスポート
Core Console の 設定 ページで、クライアントのタイムアウトフィールドの検証が正しく機能しない場合があり、エラー「捕捉されないエラーです」が表示されました。	35572	GUI、Core 設定

解決した問題の説明	問題 ID	機能エリア
ユーザーインターフェースの韓国語訳で、一時停止 ボタンの翻訳が正しくありませんでした。現在の訳：、正しい訳：。	35557	ローカライゼーション、保護の一時停止
アーカイブウィザードの スケジュール ページで、ツールチップテキストのすべての翻訳が間違っていました。	35556	ローカライゼーション、スケジュールされたアーカイブ
マシン保護ウィザードで、既存のキーで Core ベースの暗号化を使用してデータを暗号化する オプションが、選択されていないのにハイライト表示されていました。	35554	保護、GUI
エージェントレス Windows Server 2008 R2 保護対象マシンから作成された、アタッチされたアーカイブのリカバリポイントが 書き込み可能 としてマウントされた後、ボリュームを利用できませんでした。	35542	アーカイブ、エージェントレス保護
Core サービスが再スタートした後、電子メール通知テンプレートがデフォルトに戻ります。	35483	電子メール通知テンプレート、GUI
ソース Core からボリュームが欠落している場合、2 番目のターゲット Core へのレプリケーションが開始されませんでした。	35358	レプリケーション
特定の環境において、エージェントレスで保護される仮想マシン上の GPT ボリュームを、読み取り専用モードでマウントされたマウントポイントから開けませんでした。	35100	エージェントレス保護
(ダッシュボードビューの Core Console で) マシンウィジェットごとに転送ジョブを使用してすべての転送イベントを検索する際に、テキスト文字列「Transfer」が翻訳されませんでした。	34774	ローカライゼーション
イベント ページおよび リカバリポイントの範囲の削除 ウィンドウで、ユーザーがページを更新するまで、日時ピッカーが正しく機能しませんでした。	34347	イベント、GUI
ディスクのメタデータのサイズがアーカイブ中の進行状況の追跡とずれています。たとえば、ボリュームに多数のデータベースがある場合、プログレスバーが 1% に非常に長く留まり、その後速くなります。	32044	アーカイブ、メタデータ
ログとデータファイルが別のディレクトリにある場合、データベースをリカバリポイントから開くことができませんでした。	23285	リカバリ、アプリケーションサポート

表 2. DocRetriever for SharePoint の解決済みの問題

解決した問題の説明	問題 ID	機能エリア
Microsoft Office SharePoint Server 2007 (32 ビット) がインストールされているマシンで、DocRetriever Agent が機能しませんでした。	102522	復元

解決した問題の説明	問題 ID	機能エリア
SharePoint 2010 データベースからリストアイテムを取得する際に、保存済みの値の文字が XML で許可されていない場合、リストアできませんでした。	102062	復元
「ファーム」バックアップからサイトのインプレース復元を実行しようとする と、エラー「...元の宛先が見つかりません」が表示されます。	35614	復元

表 3. Linux に関する解決した問題

解決した問題の説明	問題 ID	機能エリア
パッケージダウンローダスクリプトで、破損したリンクのために Debian 8 の mono パッケージをダウンロードできませんでしたが、このリンクはその後修正されました。	102366	Debian 8
「safenet」暗号化ファイルパーティションがあるユーザーは、Rapid Recovery Agent を使用して Linux マシンを保護できませんでした。	35226	保護

表 4. Local Mount Utility の解決済みの問題

解決した問題の説明	問題 ID	機能エリア
データ重複排除 (Windows Server 2012 の機能) を有効にしたボリュームイメージはマウントできませんでした。	101472	マウント
ユーザーが LMU でいくつかのエージェントの RP の取得を試みると、「接続の進行中...」プログレスバーがハングしていました。	100635	GUI

表 5. Mailbox Restore の解決済みの問題

解決した問題の説明	問題 ID	機能エリア
アーカイブメールボックスのメッセージが、元の場所に復元された後、ユーザーの通常のメールボックスに復元されていました。	35654	復元

既知の問題

以下に、リリース時点で存在することが確認されているお客様に関係する問題 (サードパーティ製品に起因する問題も含む) の一覧を示します。

表 6. Central Management Console の既知の問題

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
ドメインコントローラー、グループ、およびアカウントの特定の設定により単一のお客様環境では Central Management Console を承認できません。 回避策：ありません。同一の状況が再現されない限り、この問題は再発しないと予想されます。	101227	認証

表 7. Core および Windows の既知の問題

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
<p>Common Internet File System (CIFS) の共有ボリュームに保存されている DVM リポジトリがランダムにオフラインになり、次のエラーが表示されます。 「共有のマップ中に複数接続エラーが発生しました。」</p> <p>回避策：サポートにお問い合わせ、この問題に対処するためのパッチを依頼します。</p>	103240	リポジトリ
<p>6.1.x に保存されているアーカイブのアーカイブ圧縮速度が、AppAssure リリース 5.4.3 で得られた速度の最大 50 % 低下します。</p> <p>回避策：ありません。</p>	103229	アーカイブ
<p>データベースファイルが保護対象 SQL Server クラスタのクォーラムディスクにある場合、ログの切り捨てが行われず、次のエラーが表示されます。「保護グループに SQL データベースがないため、保護対象の SQL ログの切り捨てがスキップされました。」</p> <p>回避策：SQL データベースを別のボリュームに移動します。または、事後転送スクリプトまたはスケジュールされたジョブを使用して SQL ログの切り捨てを単独でスケジュールします。</p>	103225	SQL ログの切り捨て
<p>Rapid Recovery Core リリース 6.0.2 以降で作成されたアーカイブのパフォーマンスが、速度と圧縮率の両方に関して、以前のリリースで作成されたアーカイブより劣っています。6.0.1 での欠陥ではありません。この欠陥はリリース 6.02 で最初に現れ、リリース 6.1.0、6.1.1、および 6.1.2 で再発しています。</p> <p>回避策：サポートにお問い合わせ、利用可能になったらすぐに、この問題に対処するためのパッチを依頼します。</p>	103212	アーカイブ
<p>ユーザーが標準の復元先に Linux システムフォルダを選択するのを制限する検証が存在しないため、次のエラーが表示されます。 「System.ApplicationException : [宛先] へのシステムフォルダのロールバックはサポートされません。」</p> <p>回避策：標準の手順を使用してシステム以外のボリュームを復元するか、または仮想エクスポートを実行します。システムボリュームを復元するには (Linux または Windows マシンの場合)、『Rapid Recovery #####』に記載されているように、ペアメタル復元を実行します。</p>	103178	復元、検証
<p>保持ポリシーロジックが特定のケースを説明していないため、ロールアップ中に毎月のリカバリポイントの生成がスキップされます。たとえば、増分スナップショットの取得中にエラーが発生した場合、または夜間ジョブが超過してロールアップが実行されない場合、ロールアップポリシーにより月あたり 1 つのリカバリポイントを保持するロジックを強制するとき、まれに、毎月のリカバリポイントが作成されない場合があります。</p> <p>回避策：スキップしたロールアップが原因である場合、回避策はロールアップの発生を遅らせる作業を変更することです。</p>	103165	保持ポリシー
<p>FIPS 140-2 プロトコルが Core で有効にされている場合、エージェントなしで保護されている VM のディスクとボリュームが検出されません。</p> <p>回避策：FIPS 140-2 を無効にするかサポートにお問い合わせください。</p>	102508	エージェントレス保護
<p>書き込みキャッシュが有効なとき、Core は 16 TB よりサイズが大きい DVM リポジトリを作成できません。</p>	102507	DVM リポジトリ

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
回避策：単一のリポジトリに複数の 16 TB 以下のストレージの場所を作成します。		
レプリケーションを使用しているとき、Core は「AABackup」という名前のシードドライブを消費できません。 回避策：フォルダ名 AABackup が予約されます。AABackup という名前をシードドライブに指定している場合は、『 <i>Rapid Recovery #####</i> 』の用語集で説明されている、禁止されている文字や語句を含まない別の値に名前を変更します。	102506	レプリケーション、シードドライブ
特定の書き込みアクティビティのあるボリュームについて低速な増分イメージが取得されます。 回避策：この状況に対応するカスタムバイナリについては、サポートにお問い合わせください。	102493	バックアップ
ローカライゼーションがフランス語 OS に設定されているとき、ロールアップジョブの後、遅延削除がキャンセルされます。 回避策：この状況に対応するカスタムバイナリについては、サポートにお問い合わせください。	102436	ローカライゼーション、削除
エクスポートされたマシンでソースマシンと異なるドライブ文字を使用する場合があります。元のソースマシンに関連付けられているドライブ文字と同一のドライブ文字を割り当てる機能をエクスポートされたマシンに実装します。 回避策：この状況に対応するカスタムバイナリについては、サポートにお問い合わせください。	102390	仮想エクスポート
固有の環境で、「リポジトリの重複排除キャッシュの再計算」が失敗したため、レプリケーションが増分ではなくすべてのデータを転送します。 回避策：サポートにお問い合わせください。	102297	レプリケーション
Windows Server 2016 でローカル Hyper-V が失敗し、次のエラーが表示されます。「WMI class 'MsvmVirtualSystemGlobalSettingData」または「クラス 'MsvmVirtualSystemGlobalSettingData' でプロパティが見つかりませんでした。」 回避策：ローカル Hyper-V Server に対する回避策はありません。リモート Hyper-V エクスポートは正常に機能します。	102223	仮想エクスポート
クラスターでホストされる VM の特定の状態のため、クラスター内のすべてのノードに対する Hyper-V エージェントレス保護が失敗し、エラー「認識されない GUID 形式です」が表示されます。 回避策：サポートに問い合わせ、この問題に対処するためのカスタムバイナリを依頼します。	102221	Hyper-V エージェントレス
ストレージが破損している場合、アーカイブの確認ジョブが失敗して、情報価値のあるエラーが表示される代わりにキャンセルされます。 回避策：ありません。	102207	アーカイブ
レプリケーションされた保護対象マシンの場合、レプリケーションを行う前にソースの設定を無効に変更しても、「リカバリポイントの整合性チェック」の夜間ジョブ設定がデフォルト（有効）に設定されます。 回避策：ありません。	102105	レプリケーション

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
<p>保護対象マシン上のリカバリポイントの Azure への 1 回限りのエクスポートを実行しようとする場合、仮想マシンのエクスポート ウィザードの 展開 ページで新しいクラウドサービス名を指定しようとする、エラーが表示されます。エラーは、「オブジェクト参照がオブジェクトのインスタンスに設定されていません」です。</p> <p>回避策：Azure アカウントから直接、従来の管理モデルを使用して、その他のリソースと同じリソースにクラウドサービスを作成します。その後で、Core のウィザードから、既存のクラウドサービス名を指定します。</p>	101819	VM エクスポート
<p>Core Console の リカバリポイント ページでは、ページを切り替えるためのメニューを追加すると役に立ちます。</p> <p>回避策：既存のナビゲーションを使用します。</p>	101736	UI
<p>シードドライブジョブが失敗し、エラー「データ書き込みタスクに失敗しました」が表示されます。</p>	101617	レプリケーション
<p>Windows Server 2016 でセキュアブートオプションを有効している場合、エージェントのインストール中に一部のドライブのインストールがブロックされ、次のエラーが表示されます。「転送できませんでした。」</p>	101573	インストーラ
<p>数週間後に、VM エクスポートが失敗します。TCP/IP イベント 4227 がシステムログに表示され、メッセージ「選択したローカルエンドポイントは、同じリモートエンドポイントに接続するために最近使用されたため、TCP/IP は発信接続を確立できませんでした。」が表示されます。このエラーは通常、高速で開閉されたときに発生し、利用可能なローカルポートがすべて使用され、TCP/IP に発信接続用のローカルポートの再使用を強制します。</p> <p>回避策：一時的に動的ポートの範囲を広げ、サーバを定期的に再起動します。</p>	101485	仮想エクスポート
<p>高負荷下では、数日後に DL バックアップおよびリカバリアプライアンスの ESXi エクスポートが失敗し始め、エラー「System.OutOfMemoryException」が表示されます。</p>	101246	仮想エクスポート
<p>システムテスト環境で、ESXi 仮想スタンバイが失敗し、エラー「同じキーのエントリが既に存在します」が表示されます。</p>	100868	仮想エクスポート
<p>未消費のシードドライブでリカバリポイントにロールアップが実行されていないという警告メッセージが表示されません。これは、未処理のシードドライブがあるレプリケーションを使用している環境のみに関係しています。</p> <p>回避策：この欠陥は通知の不在を説明しているだけであるため、回避策は不要です。</p>	35823	レプリケーション
<p>MongoDB 接続の 最大接続プールサイズ フィールドおよび 最小接続プールサイズ フィールドが検証されず、ユーザーが最小値より低い最大値を設定できます。</p> <p>回避策：適切な値を設定します。</p>	35607	Core 設定
<p>NTFS 起動セクターのコピーが変更されたとき、Windows Server 2012 R2 保護対象マシンで増分イメージではなくベースイメージが取得されます。この欠陥は、NTFS 起動セクターのコピーを変更するサードパーティ製ソフトウェアをインストールしたユーザーのみに影響します。</p> <p>回避策：回避策はありません。</p>	34981	バックアップ

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
<p>休止が有効化されているスナップショットがある ESXi VM で予期しないベースイメージが取得されます。欠陥が影響するのは、休止が有効化されている SAN スナップショットがある vCenter 仮想マシンを保護するユーザーのみです。回避策：休止を無効にします。</p>	34916	仮想エクスポート
<p>マシンウィジェットごとに 転送ジョブ を使用してすべての転送イベントを検索するとき (Core Console をダッシュボードビューで表示)、'Transfer' という単語が翻訳されていません。</p>	34774	ローカライゼーション
<p>断片化が進んでいるリポジトリからのリカバリポイントでエクスポート速度が低下します。</p> <p>回避策：2つのオプションが利用できます。オプション1：マシン保護を一時停止し、そのマシンのすべてのリカバリポイントをアーカイブし、リポジトリを削除して、新しいリポジトリを作成し、保護対象マシンを新しいリポジトリに割り当て、アーカイブを新しいリポジトリにインポートしてから、保護を再開します。オプション2：サポートに問い合わせ、この問題に対処するためのカスタムバイナリを依頼します。</p>	34758	仮想エクスポート、リポジトリ
<p>複数の同時保護対象マシン (例：36) のエクスポートを実行すると、仮想スタンバイのパフォーマンスの速度が低下します。</p> <p>回避策：許可される同時エクスポートジョブの数を減らします。</p>	34434	仮想エクスポート
<p>VM がネットワークファイルシステム (NFS) データストアにある場合、保護対象マシンのサマリページに警告メッセージ「一部のボリューム用に割り当てられた容量に関する情報が利用できません...」が表示されます。</p> <p>回避策：回避策はありません。これは、NFS データストアに外されている VM の制限です。</p>	33551	サマリ情報
<p>仮想エクスポートジョブがレプリケーションジョブと同時に開始された場合、レプリケーションレートが非常に遅くなります。</p> <p>回避策：スケジュールを使用して、レプリケーションとエクスポートが同時に実行されるのを回避します。</p>	33230	仮想エクスポート、レプリケーション、リソース消費量
<p>同時に2つ以上のジョブをアーカイブするとき、ターゲットネットワークストレージデバイスに空き容量がなくなると、実行中のすべてのアーカイブジョブが失敗し、次のエラーが表示されます。「ディスク容量が不足しています」</p> <p>回避策：アーカイブがネットワーク共有で同時に実行されないように各アーカイブを実行するための異なるスケジュールを作成します。</p>	31827	アーカイブ
<p>エージェントなしで保護されている WinXPx86 マシンの仮想エクスポートの後、または ESXi ホストで保護されているマシンの仮想エクスポートの後、得られた VM が起動可能ではありません。エクスポートされた VM に存在しない SCSI および IDE コントローラのコントローラドライバに関連する問題です。</p> <p>回避策：この時点では回避策はありません。</p>	31705	仮想エクスポート
<p>ESXi ホストから RHEL 6 または 7 を仮想エクスポートした後、得られた VM が起動可能ではありません。</p> <p>回避策：ありません。</p>	31277	仮想エクスポート
<p>SAN 転送モードを使用する ESXi エージェントレス復元または仮想エクスポートが失敗し、「パラメータのひとつが無効です」というエラーが発生します。</p>	29508	VMware エージェントレ

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
回避策：データの復元用のネットワーク転送モードを使用します。		ス、データの復元
ESXi からの VM エクスポートに自動ディスクマッピングを使用している場合、まれにエラーが発生して情報価値のない次のメッセージが表示されます。「タスク 'ReconfigVM_Task' が失敗しました。デバイス '0' の設定が無効です。」 回避策：操作を再試行すると成功するはずです。	27309	仮想エクスポート

表 8. DL アプライアンスの既知の問題

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
特定のお客様の環境で、ストレージプールが存在しないエンクロージャを参照するため、アプライアンスのプロビジョニングページが利用できなくなり、エラー「CIM シャーシエラー」が表示されます。 回避策：サポートにお問い合わせ、この問題に対処するためのカスタムバイナリを依頼します。	102495	GUI
バックアップ ページに「内部サーバエラー」が表示されることがあります。 回避策：エラーメッセージを無視して閉じます。	102379	ストレージのプロビジョニング
6.1.2 にアップグレードした後、プロビジョニング設定の復元後にリポジトリの保守に失敗しました。 回避策：サポートにお問い合わせください。	102340	Windows のバックアップ
ユーザーが、DL アプライアンスで同時に複数の再マウントジョブを起動できません。 回避策：他のジョブが実行されていないことを確認するまで、再マウントジョブを複数回起動しないでください。この問題が発生した場合は、リポジトリを再マウントするために Quest Support にお問い合わせください。	102322	ストレージのプロビジョニング
新しいリポジトリの追加 ウィザードの リポジトリ名 フィールドのデフォルト値が正しくありません。 回避策：フィールド検証ルールに適合するリポジトリ名を手動で入力します。	101348	ストレージのプロビジョニング
ジョブを再マウントしても、Core のローカライゼーションが復元されない。 回避策：Core 設定で Core のローカライズを手動で変更します。	101316	ストレージのプロビジョニング
しばらく稼働してから、DL アプライアンスでジョブが失敗し、エラー「System.OutOfMemoryException」が表示されます。 回避策：最新の Windows アップデートをインストールし、アプライアンスを再起動します。この問題が解決しない場合は、サポートにお問い合わせください。	101246	ストレージのプロビジョニング
'リカバリ' パーティションに文字が割り当てられている場合、ボリュームのステータスが '有効ではありません' と表示される。 回避策：RASR USB 作成ジョブが完了するまで待ちます。	101224	仮想エクスポート

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
<p>新しい ID モジュールを搭載している DL1300 および DL4300 で RASR が致命的な例外により起動に失敗します。</p> <p>回避策：サポートにお問い合わせください。</p>	101051	ストレージのプロビジョニング
<p>ボリュームの文字が変更された場合、バックアップに必要なボリュームアイテムを適切に判断できないため、Windows バックアップを作成できない。</p> <p>回避策：パーティションの文字が混乱している、または変更されている現在のポリシーを削除し、異機種混在ボリュームラベルで新しいポリシーを作成します。</p>	100985	RASR
<p>RUU # 3.1 を使用してアップグレードした後、'既存のリポジトリを拡張' ポップアップのパラメーターが、DL1300 の内部コントローラでリポジトリの拡張に実際に使用できる容量を反映しなくなる。</p> <p>回避策：リポジトリ設定ページからリポジトリを展開します。</p>	100908	Windows のバックアップ
<p>ストレージプロビジョニングジョブとプロビジョニング設定復元ジョブには互換性がないにもかかわらず、同時に開始できる。</p> <p>回避策：1) OMSA を使用して作成済みリポジトリ 2 仮想ディスクを削除します。2) Core サービスを再起動します。</p>	100907	ストレージのプロビジョニング
<p>Windows バックアップからサーバが復元された場合、RUU を使用してアップグレードすると、それ以降、RASR USB をサーバ上に作成できない</p> <p>回避策：RASR の復元は、次の場所から実行します。1) 以前に作成された RASR USB、2) リカバリ パーティション (POST 中に F8 を押す)、3) RASRdisk 仮想ディスク、4) IDSDM (DL4300 のみ)。</p>	100905	ストレージのプロビジョニング
<p>Core とアプライアンスのログ収集を強制すると、Core インタフェースが使用できなくなる。</p> <p>回避策：GUI を再び使用可能にするには、ページを更新します</p>	100904	RASR
<p>ボリュームサイズが 75 GB の以前の Winbackups を搭載していて、内部コントローラに空き容量がないサーバで Windows バックアップを強制すると、メインアプライアンス ステータスが、解決する機能のない赤色の状態になる。</p> <p>回避策：次の手順に従い、Windows バックアップのログをクリアします。1) イベントビューアーを開きます。2) アプリケーションとサービスログに移動します。3) Microsoft、Windows、バックアップの順に移動します。4) Operational チャネルを右クリックし、保存と消去を選択します (または保存しない場合は 消去 を選択します)。</p>	100887	UI
<p>再マウントの前に、すでに使用されている文字が仮想ディスクに含まれている場合、情報価値のないエラー「ボリュームにファイルまたはフォルダが含まれているため、フォルダ I:\ にボリュームをマウントできません」が表示され、プロビジョニング設定復元ジョブが失敗します。</p> <p>回避策：ディスクマネージャ経由で連結された仮想メディアから割り当て済みの文字を削除します。アプライアンスプロビジョニング ページから、ボリュームの再マウントジョブをもう一度実行します。</p>	35805	プロビジョニング
<p>プロビジョニングサイズ決定ロジックが正しく動作しない。</p> <p>回避策：プロビジョニングを実行する場合は、使用可能な容量よりも数 GB 小さい目的サイズを指定します。</p>	35770	Windows のバックアップ

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
ESXi ホストがメンテナンスモードになっている場合でも、VMM アクションを実行できる。 回避策：ESXi ホストがメンテナンスモードになっている場合は、仮想スタンバイ ページから VM 操作を実行しないでください。	35740	ストレージのプロビジョニング
再マウントプロセスの確認後、すぐに GUI が無効になる。 回避策：数分間待つてから、Core Console ページを更新します。	35579	仮想マシンの管理
RASR USB ジョブの作成時に、アクティブタスクの監視が 95% の確率でハングする。 回避策：GUI を更新してください。通常、ジョブは正常に完了しますが、GUI を更新するまで正しいステータスが反映されない場合があります。	35531	ストレージのプロビジョニング
特定の環境でジョブ「プロビジョニング設定の復元」に失敗する。 回避策：「プロビジョニング復元」操作を実行する前に、すべての物理メディアと仮想メディアをサーバから分離します。	35137	RASR
バックアップ ページで、英語以外のいくつかの言語の アイテムバックアップ セクションに「State」の誤訳が表示されます。 回避策：ありません。	35031	ストレージのプロビジョニング
ストレージプールの空き容量が安定していない場合、VD ディスクプロビジョニングが戻りコード 4 で失敗する。 回避策：サポートにお問い合わせください。	34937	ローカライゼーション
DL4x00 アプライアンスの 仮想スタンバイ タブで「無効状態、すでに開いている」エラーが表示されることがある。 回避策：エラーメッセージを閉じます。問題が解決しない場合は、F5 をクリックしてページをリロードします。	31477	ストレージのプロビジョニング
マシンの ESXi/ Hyper-V エクスポートがアプライアンス上で開始された場合、VM/ ネットワークアダプタの起動 ボタンがすべて無効状態になっている必要がある。回避策：これらのボタンは、該当する VM エクスポートが完了するまでクリックしないでください。	30989	仮想マシンの管理

表 9. マニュアルの既知の問題

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
コンポーネント Microsoft Windows Azure Storage 7.2.1 が、製品で見つかったサードパーティ製コンポーネントのリストに表示されません。その代わりに古いバージョンのコンポーネントが表示されます。 回避策：Microsoft Windows Azure Storage 7.2.1 では、Apache 2.0 ライセンスを使用します。このライセンスは、製品内ヘルプの本製品に使用されているサードパーティソフトウェアのリストにあり、Rapid Recovery について ページからハイパーリンクされています。	102504	コンテキスト依存のヘルプ
コンポーネント DataGridViewImageAnimator 1.0 は、Rapid Recovery 6.1.2 で使用されませんでしたが、本製品に使用されているサードパーティコンポーネントのリストに表示されます。	102503	コンテキスト依存のヘルプ

既知の問題の説明

問題 ID 機能エリア

回避策：コンポーネントは、今後のリリースで本製品に使用されているサードパーティソフトウェアリストから削除されます。

コンポーネント SimpleRestServices 1.3.0.3 が、本製品に使用されているサードパーティコンポーネントのリストに表示されません。その代わりに古いバージョンのコンポーネントが表示されます。

102502 コンテキスト依存のヘルプ

回避策：SimpleRestServices 1.3.0.3 は Rapid Recovery 6.1.2 で使用されています。このコンポーネントでは、MIT N/A ライセンスを使用します。本ライセンスのコピーについては、以下を参照してください。<http://quest.com/legal/third-party-licenses.aspx>

コンポーネント OpenStack.NET 1.4.0.2 が、本製品に使用されているサードパーティコンポーネントのリストに表示されません。その代わりに古いバージョンのコンポーネントが表示されます。

102501 コンテキスト依存のヘルプ

回避策：OpenStack.NET 1.4.0.2 は Rapid Recovery 6.1.2 で使用されました。このコンポーネントでは、MIT N/A ライセンスを使用します。本ライセンスのコピーについては、以下を参照してください。<http://quest.com/legal/third-party-licenses.aspx>

コンポーネント NLog 3.2.1 が、本製品に使用されているサードパーティコンポーネントのリストに表示されません。その代わりに古いバージョンのコンポーネントが表示されます。

102500 コンテキスト依存のヘルプ

回避策：NLog 3.2.1 は Rapid Recovery 6.1.2 で使用されました。このコンポーネントでは BSD - Kowalski 2011 ライセンス、Copyright (c) 2004-2011 Jaroslaw Kowalski <jaak@jkowalski.net> を使用します。本ライセンスのコピーについては、以下を参照してください。<http://quest.com/legal/third-party-licenses.aspx>

コンポーネント AWS SDK for .NET 3.3.1.2 が、本製品に使用されているサードパーティコンポーネントのリストに表示されません。その代わりに古いバージョンのコンポーネントが表示されます。

102499 コンテキスト依存のヘルプ

回避策：AWS SDK for .NET 3.3.1.2 では、Apache 2.0 ライセンスを使用します。このライセンスは、製品内ヘルプの本製品に使用されているサードパーティソフトウェアのリストにあり、Rapid Recovery について ページからハイパーリンクされています。

Rapid Recovery Core の製品内にあるコンテキスト依存のヘルプが、Quest Software による所有権を反映するために、リリース 6.1.2 でブランド変更されました。ブランド変更のほかは、このリリースでのヘルプファイルのコンテンツに変更はありません。

70130 コンテキスト依存のヘルプ

『Rapid Recovery #####』リリース 6.1.x の「Azure での仮想マシンの展開」の手順に不要な手順が含まれています。将来のバージョンのマニュアルでは、適切に変更されます。

101859 Azure でのエクスポート

回避策：この手順を実行する場合は、手順 4 ～ 8 を無視してください。現在の手順 9 は、「宛先 ページで...」で始まる必要があります。

『Rapid Recovery #####』リリース 6.1.x の「Azure への連続エクスポートの設定」の手順に不要な手順が含まれています。将来のバージョンのマニュアルでは、適切に変更されます。

101858 Azure でのエクスポート

回避策：この手順を実行する場合は、手順 4 と 5 を無視してください。継続的な連続エクスポートを定義しているため、リカバリポイントを選択するように求められることはありません。同様に、ウィザードの最後に サマリ ページはあ

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
りません。ウィザードの ポリューム ページで、完了 をクリックします (次へ ではありません)。		
<p>Azure で作成されたコンテナは、Rapid Recovery Core から、関連付けられている Azure アカウントにエクスポートされた仮想マシンを保存するために使用されます。仮想エクスポートを実行する前に特定のコンテナを作成した場合は、仮想マシンのエクスポート ウィザードで通常、宛先 ウィンドウの コンテナ名 フィールドに選択肢の 1 つとしてそのコンテナが表示されます。仮想エクスポートを定義する処理の一部として コンテナ名 フィールドに有効なコンテナ名を入力することによってコンテナを作成した場合、そのコンテナがウィザードに直ちに表示されない場合があります。この動作が、『Rapid Recovery #####』の該当する手順に記載されていません。</p> <p>回避策：仮想マシンエクスポート ウィザードからコンテナを作成する場合に、ウィザード UI でそのコンテナにアクセスできない場合は、単にウィザードを閉じて、もう一度起動すると、新しく作成されたコンテナにアクセスできるはずです。将来のバージョンのマニュアルでは、適切に変更されます。</p>	101853	Azure でのエクスポート
<p>Azure への仮想エクスポートを実行するときには、Rapid Recovery Core は、従来の管理モデルを使用して作成された Azure のストレージとコンテナを使用します。新しい Resource Manager 展開モデルを使用して Azure で作成されたコンテナは、Core によって認識されません。『Rapid Recovery #####』リリース 6.1.x の「Azure ストレージアカウントでのコンテナの作成」手順では、従来の管理モデルが必要であることが示されていません。将来のバージョンのマニュアルでは、適切に変更されます。</p> <p>回避策：従来の管理モデルを使用して、仮想エクスポート用のストレージアカウントとコンテナを作成します。従来のモデルを使用してすでにストレージアカウントを作成している場合、このアカウント用に作成される新しいコンテナは、自動的に正しいモデル (従来のモデル) を使用します。</p>	101837	Azure でのエクスポート

表 10. Kaseya アドオンの既知の問題

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
Kaseya サーバで Core および Agent の資格情報が AppRecoveryParams.json ファイルに暗号化されていないテキストで保存される場合があります。	102096	認証

表 11. Linux 保護の既知の問題

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
Ubuntu Linux Agent に「non fs data」パーティションタイプが含まれている場合は、保護できません。	102284	メタデータ
<p>Linux Agent で Transport Layer Security (TLS) 1.2 プロトコルが使用できません。</p> <p>回避策：TLS を無効にします。</p>	101279	セキュリティ
<p>Agent サービスが、最初にインストールされたシステム以外の init システムを使用する Linux マシンにインストールされた場合、Agent サービスを開始できないことを示す警告メッセージが表示されません。たとえば、Debian 8 はデフォルトで SysD を使用します。SysD が削除され SysV がインストールされた場合、Agent は起動しません。</p> <p>回避策：この欠陥は通知の不在を説明しているだけであるため、回避策は不要です。</p>	35818	通知

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
Linux マシンの仮想エクスポートの後、特定のボリュームがマウントされません。この欠陥は、iSCSI Dell EqualLogic マシン上に LVM ボリュームがあるお客様にのみ該当します。 回避策：この時点では回避策はありません。	35288	仮想エクスポート (ESXi)
BMR 後に、エージェントレスの保護対象 Ubuntu マシンが起動できません。回避策：エージェントレス保護を使用する代わりに、Ubuntu で Rapid Recovery Agent を使用します。	31206	BMR の起動性

表 12. Local Mount Utility の既知の問題

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
Windows Server 2016 マシンにマウントされたリカバリポイントで 閲覧 ボタンが無効になっています。 回避策：Windows エクスプローラを使用してマウントされたリカバリポイントでデータを検索します。	101860	マウント

表 13. Mailbox Restore の既知の問題

既知の問題の説明	問題 ID	機能エリア
MailboxRestore は、しらけた顔 (ASCII 記号「😒」) など、顔文字を含むメッセージを復元できません。 回避策：サポートにお問い合わせ、この問題に対処するためのカスタムバイナリを依頼します。	102360	復元
パブリックフォルダに対する権限の復元中、グローバルアドレス一覧でユーザーが見つからない場合、情報価値のないエラーメッセージが表示されます。 回避策：この欠陥は、無視できるエラーメッセージについて説明しているだけであるため、回避策は不要です。	102018	復元

Rapid Recovery のシステム要件

本項では、Rapid Recovery Core、Rapid Recovery Agent、および Rapid Recovery Central Management Console のインストールに必要なシステム要件とライセンス要件について説明します。

次のトピックで構成されています。

- 推奨されるネットワークインフラストラクチャ
- UEFI および ReFS のサポート
- ダイナミックボリュームとベーシックボリュームのサポート
- クラスタ共有ボリュームのサポート
- Rapid Recovery Core のインストール要件
- Rapid Recovery リリース 6.1 のオペレーティングシステムのインストールと互換性対照表
- Rapid Recovery Core および Central Management Console の要件
- Rapid Recovery Agent のソフトウェア要件
- Rapid Recovery Local Mount Utility ソフトウェアの要件
- Rapid Snap for Virtual のエージェントレス保護
- ハイパーバイザの要件
- DVM リポジトリの要件
- ライセンス要件
- Quest のサポートポリシー

推奨されるネットワークインフラストラクチャ

Rapid Recovery のパフォーマンスを最大化して実行するには、最低でも 1 ギガビットイーサネット (GbE) のネットワークインフラストラクチャが必要です。堅牢な環境が求められる場合は 10 GbE のネットワークを使用することをお勧めします。また、大容量 (5TB 以上) のサーバを保護する場合は、10 GbE ネットワークをお勧めします。

Core マシンで、NIC チーミング (複数の物理 NIC を単一の論理 NIC にグループ化する機能) をサポートする複数のネットワークインタフェースカード (NIC) が使用可能です。ネットワーク内のスイッチで NIC チーミングが許可されている場合は、Core で NIC チーミングを使用すると、さらにパフォーマンスを向上させることができます。このような場合、可能であれば、保護対象マシンで NIC チーミングをサポートする予備のネットワークカードをチーミングすることにより、全体的なパフォーマンスも向上できます。

Core で iSCSI またはネットワーク接続ストレージ (NAS) を使用する場合、ストレージとネットワークトラフィック向けに個別の NIC カードを使用することをお勧めします。

想定帯域幅での通信を実現するには、適切な規格のネットワークケーブルを使用してください。お使いのネットワークのパフォーマンスを定期的にテストし、それに応じてお使いのハードウェアを調整することをお勧めします。

これらの提案は、Rapid Recovery の提供するバックアップ、レプリケーション、およびリカバリの各機能だけではなく、事業運営をサポートするためのすべての要求に対応したネットワークインフラストラクチャが必要とする、標準的なネットワーク要件に基づいています。

UEFI および ReFS のサポート

Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) は、BIOS に置き換わるものです。Windows システムの場合、UEFI は単純な FAT32 ボリュームとして処理される、拡張ファームウェアインタフェース (EFI) システムパーティションを利用します。

保護機能およびリカバリ機能は、次のオペレーティングシステムを使用して、EFI システムパーティションの Rapid Recovery で使用できます。

- **Windows** : Windows 8、Windows 8.1、Windows 10、Windows Server 2012、Windows Server 2012 R2、Windows Server 2016。
- **Linux** : すべてのサポートされているバージョンの Linux。

また、Rapid Recovery では、Windows Server 2012、Windows Server 2012 R2、および Windows Server 2016 の Resilient File System (ReFS) ボリュームの保護とリカバリにも対応しています。

ダイナミックボリュームとベーシックボリュームのサポート

Rapid Recovery では、すべてのダイナミックボリュームとベーシックボリュームのスナップショットを作成できます。また、Rapid Recovery では、1 つの物理ディスク上にあるシンプルダイナミックボリュームのエクスポートも可能です。その名前が示すように、シンプルダイナミックボリュームはストライプボリューム、ミラーボリューム、スパンボリューム、RAID ボリュームのいずれでもありません。

ダイナミックディスクの仮想エクスポートの動作は、エクスポートするボリュームが Rapid Recovery Agent ソフトウェアで保護されているかどうか、またはエージェントレス保護を使用している VM であるかどうかに基づいて異なります。これは、非シンプルダイナミックボリュームまたは複雑なダイナミックボリュームには Rapid Recovery Agent が完全には認識できない任意のディスクジオメトリがあるためです。

Rapid Recovery Agent ソフトウェアを使用して複雑なダイナミックディスクをマシンからエクスポートしようとする、エクスポートはシンプルダイナミックボリュームに制限されていることを警告する通知がユーザーインタフェースに表示されます。Rapid Recovery Agent を使用したシンプルダイナミックボリューム以外のものをエクスポートしようとする、エクスポートジョブが失敗します。

これとは対照的に、エージェントレス保護を使用している VM のダイナミックボリュームは、いくつかの重要な制限事項に基づいて、保護、仮想エクスポート、データの復元、BMR およびリポジトリのストレージでサポートされています。たとえば、次のとおりです。

- **保護** : ダイナミックボリュームが複数のディスクにまたがっている場合は、それらのディスクをまとめて保護し、ボリュームの整合性を維持する必要があります。
 - **仮想エクスポート** : エージェントレス保護を使用している ESXi または Hyper-V のホストから、ストライプボリューム、ミラーボリューム、スパンボリューム、RAID ボリュームなどの複雑なダイナミックボリュームをエクスポートすることができます。ただし、ボリュームはボリューム解析のないディスクレベルでエクスポートされます。たとえば、2 つのディスク間にまたがるダイナミックボリュームをエクスポートすると、エクスポートには 2 つの別個のディスクボリュームが含まれます。
- **CAUTION:** 複数のディスクにまたがるダイナミックボリュームをエクスポートする場合、元のシステムボリュームでダイナミックディスクをエクスポートし、ディスクタイプを維持する必要があります。
- **データの復元** : 複数のディスクにまたがるダイナミックボリュームを復元する場合、元のシステムボリュームでダイナミックディスクをエクスポートし、ディスクタイプを維持する必要があります。ディスクを 1 つだけ復元すると、ディスク設定が破壊します。

リポジトリストレージ : さらに、Rapid Recovery は複雑なダイナミックボリューム (ストライプ、ミラー、スパン、RAID) でのリポジトリの作成をサポートしています。リポジトリをホストしているマシンのファイルシステムは、NTFS または ReFS である必要があります。

クラスタ共有ボリュームのサポート

Rapid Recovery リリース 6.1 以降には、Rapid Snap for Virtual 機能が含まれています。Rapid Recovery Agent が各ノードにインストールされた状態で、Windows Server 2012 R2 および Windows Server 2016 にインストー

ルされている Hyper-V クラスタ共有ボリューム (CSV) 上でホストされているサポートされる VM を保護および復元できます。

さらに、Rapid Recovery リリース 6.1 以降は、Windows Server 2008 R2、Windows Server 2012、Windows Server 2012 R2、および Windows Server 2016 にインストールされた Hyper-V CSV への仮想エクスポートをサポートします。サポートされているハイパーバイザーに関する詳細については、「[ハイパーバイザーの要件](#)」を参照してください。

Rapid Recovery は、Windows Server 2008 R2 上で実行されている CSV ボリュームの保護と復元のみをサポートします。

次の表に、Rapid Recovery におけるクラスタ共有ボリュームの現在のサポート状況を示します。

表 14. Rapid Recovery によるクラスタ共有ボリュームのサポート

オペレーティングシステム	Hyper-V CSV 上の VM の保護 ¹ と復元 ²		Hyper-V CSV への仮想エクスポート		CSV の保護 ¹ と復元 ³	
	6.0.x	6.1.x	6.0.x	6.1.x	6.0.x	6.1.x
CSV オペレーティングシステム	Rapid Recovery のバージョン		Rapid Recovery のバージョン		Rapid Recovery のバージョン	
Windows Server 2008 R2	いいえ	いいえ	はい	はい	はい	はい
Windows Server 2012	いいえ	いいえ	はい	はい	いいえ	いいえ
Windows Server 2012 R2	いいえ	はい	はい	はい	いいえ	いいえ
Windows Server 2016	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	いいえ

¹ 保護には、プロテクション、レプリケーション、ロールアップ、マウント、アーカイブが含まれます。

² 復元には、ファイルレベルの復元、ボリュームレベルの復元、ベアメタル復元、仮想エクスポートが含まれます。

³ 復元には、ファイルレベルの復元、ボリュームレベルの復元、およびベアメタル復元が含まれます。

Rapid Recovery Core のインストール要件

Rapid Recovery Core は、専用の Windows 64 ビットサーバにインストールしてください。サーバには、Rapid Recovery に関係がない他のアプリケーション、役割、または機能をインストールしないでください。たとえば、Core マシンをハイパーバイザーホストとしても使用しないようにしてください (サーバが適切にサイジングされた Quest DL シリーズのバックアップおよびリカバリのアプライアンスである場合は除く)。

別の例として、Core サーバをトラフィック量が多いウェブサーバとして使用することもやめてください。可能な場合は、Microsoft Exchange Server、SQL Server、または Microsoft SharePoint を Core マシンにインストールして実行しないようにしてください。Core マシンに SQL Server が必要な場合 (たとえば、Rapid Recovery DocRetriever for SharePoint を使用している場合) は、Core の動作に必要なリソース以上のリソースが割り当てられていることを確認します。

ライセンスおよび環境の要件に応じて、複数の Core をそれぞれ専用サーバにインストールすることが必要な場合があります。必要に応じて、複数の Core をリモート管理する場合は、64 ビット Windows コンピュータに Rapid Recovery Central Management Console をインストールすることもできます。

Rapid Recovery Core で保護するマシンごとに、そのマシンのオペレーティングシステムに対応するバージョンの Rapid Recovery Agent ソフトウェアをインストールします。必要に応じて、VMware ESXi ホスト上の仮想マシンを Rapid Recovery Agent をインストールせずに保護することができます。このエージェントレス保護には、いくつかの制限事項があります。詳細については、『*Rapid Recovery User Guide*』 (Rapid Recovery ユー

ザーガイド)の「Understanding Rapid Snap for Virtual」(Rapid Snap for Virtualについて)のトピックを参照してください。

Rapid Recovery リリース 6.1 をインストールする前に、お使いのシステムが、次に示すハードウェアおよびソフトウェアの最小要件を満たしていることを確認してください。ハードウェア、ソフトウェア、メモリ、ストレージ、およびネットワーク要件のサイジングに関する詳細については、サポート技術情報の記事 185962 の「Sizing Rapid Recovery Deployments」(Rapid Recovery 展開のサイジング)を参照してください。

- **CAUTION:** サーバの役割が制限される Windows Core オペレーティングシステムでの Rapid Recovery Core の実行はサポートされていません。これには、Windows Server 2008 Core、Windows Server 2008 R2 Core、Windows Server 2012 Core、Windows Server 2012 R2 Core、および Windows Server 2016 Core のすべてのエディションが含まれます。Windows Server 2008 Core を除いて、これらの Core エディションのオペレーティングシステムでは、Rapid Recovery Agent ソフトウェアの実行がサポートされています。
- **NOTE:** Microsoft Small Business Server または Microsoft Windows Server Essentials などのオールインワンサーバシリーズへ Rapid Recovery Core をインストールすることはお勧めしません。
- **CAUTION:** Hyper-V ホストとして稼働している物理マシンと同じマシンで Rapid Recovery Core を実行することもお勧めしません。(ただし、Quest DL シリーズのバックアップおよびリカバリアプライアンスを使用する場合は、その限りではありません)。

Rapid Recovery リリース 6.1 のオペレーティングシステムのインストールと互換性対照表

Microsoft Windows オペレーティングシステム

Rapid Recovery Core は、サポート対象の 64 ビット Microsoft Windows オペレーティングシステムを実行している、適切にサイジングされたサーバにインストールする必要があります。次の表および注意事項では、各 Windows オペレーティングシステムで利用可能な Rapid Recovery のコンポーネントまたは機能についてそれぞれ記載しています。

- **NOTE:** この情報は、各環境で利用可能な機能をユーザーに把握してもらうことを目的としています。Quest では、サポートが終了しているオペレーティングシステムをサポートしていません。

表 15. Windows オペレーティングシステムで利用可能な Rapid Recovery のコンポーネントと機能

この表では、サポート対象の Windows OS と、その各 OS で利用可能な Rapid Recovery のコンポーネントをリストしています。

Windows OS	Core/ Central Management Console	Agent	エー ジェン トレス	LMULMUMR	DR	URC リ ストア	Azure への VM エ クス ポート
Windows XP SP3	いいえ	いいえ	はい	いいえ	いいえ	はい ¹	いいえ
Windows Vista	いいえ	いいえ	はい	いいえ	いいえ	はい ¹	いいえ
Windows Vista SP2	いいえ	はい	はい	はい	はい	はい ¹	いいえ
Windows 7	いいえ	いいえ	はい	いいえ	いいえ	はい	はい ²
Windows 7 SP1	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい ²

Windows OS	Core/ Central Management Console	Agent	エー ジェン トレス	LMULMUMR	DR	URC リ ストア	Azure への VM エ クス ポート
Windows 8	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい ²
Windows 8.1	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい ²
Windows 10	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい ²
Windows Server 2003	いいえ	いいえ	はい	いいえ	いいえ	はい ¹	いいえ
Windows Server 2008	いいえ	いいえ	はい	いいえ	いいえ	はい ¹	はい ²
Windows Server 2008 SP2	はい	はい	はい	はい	はい	はい ¹	はい ²
Windows Server 2008 R2	いいえ	いいえ	はい	いいえ	いいえ	はい	はい ²
Windows Server 2008 R2 SP1	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい ²
Windows Server 2012	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい ²
Windows Server 2012 R2	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい ²
Windows Server 2016	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい

Windows のインストールとサポートの注意事項：

¹ ブート CD は bare metal restore をサポートしていますが、ドライバの導入はサポートしていません。

² Azure への VM エクスポートは、リストに示されているオペレーティングシステムの x64 エディションでのみ動作します。

Linux オペレーティングシステム

Linux オペレーティングシステムは、Rapid Recovery Core の保護対象マシンとしてサポートされています。エージェントレス保護が使用できます。または、Rapid Recovery Agent をインストールすることも可能です。次の表および注意事項では、サポート対象の各 Linux オペレーティングシステムとディストリビューションのリストと Rapid Recovery のコンポーネントまたは機能それぞれのサポート状況を記載しています。

表 16. Linux オペレーティングシステムで利用可能な Rapid Recovery のコンポーネントと機能

この表では、サポート対象の Linux ディストリビューションと、その各 Linux ディストリビューションで利用可能な Rapid Recovery のコンポーネントをリストしています。

Windows OS	Core/Central Management Console	Agent	エー ジェン ト レ ス
Linux OS またはディストリビューション	Agent	エー ジェン ト レ ス	ライブ DVD
Red Hat Enterprise Linux 6.3 ~ 6.8	はい	はい	はい

Windows OS	Core/Central Management Console	Agent	エージェントレス
Red Hat Enterprise Linux 7.0 ～ 7.3	はい	はい	はい
CentOS Linux 6.3 ～ 6.8	はい	はい	はい
CentOS Linux 7.0 ～ 7.3	はい	はい	はい
Debian Linux 7、8	はい	はい	はい
Oracle Linux 6.3 ～ 6.8	はい	はい	はい
Oracle Linux 7.0 ～ 7.3	はい	はい	はい
Ubuntu Linux 12.04 LTS、12.10	はい	はい	はい
Ubuntu Linux 13.04、13.10	はい	はい	はい
Ubuntu Linux 14.04 LTS、14.10	はい ¹	はい ¹	はい ¹
Ubuntu Linux 15.04、15.10	はい ¹	はい ¹	はい ¹
Ubuntu Linux 16.04 LTS	はい ¹	はい ¹	はい ¹
SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP2 以降	はい	はい	はい
SLES 12	はい ¹	はい ¹	はい ¹

Linux のインストールとサポートの注意事項：

¹ B ツリーファイルシステム (BTRFS) は、バージョン 4.2 以降のカーネルを使用するオペレーティングシステムでのみサポートされます。対応オペレーティングシステムは、現在の Ubuntu バージョン 14.04.4、15.10、および 16.04 です。SLES バージョン 12 および 12 SP1 では古いバージョンのカーネルを使用しているため、Rapid Recovery はこのオペレーティングシステムでの BTRFS の実装をサポートしません。

Rapid Recovery Core および Central Management Console の要件

Rapid Recovery Core と Central Management Console (CMC) の要件は次のとおりです。

Central Management Console のオペレーティングシステム要件は、Rapid Recovery Core の要件と同じです。これらのコンポーネントは、必要に応じて同じマシンにインストールすることも、異なるマシンにインストールすることもできます。

表 17. Rapid Recovery Core および Central Management Console の要件

要件	詳細
オペレーティングシステム	<p>Rapid Recovery Core と Central Management Console には、次の 64 ビット Windows オペレーティングシステム (OS) のいずれかが必要です。32 ビット Windows システムまたは Linux ディストリビューションでは動作しません。Rapid Recovery Core には、次の x64 Windows オペレーティングシステム (OS) のいずれかが必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Microsoft Windows 7 SP1 • Microsoft Windows 8、8.1* • Microsoft Windows 10 • Microsoft Windows Server 2008 SP2、2008 R2 SP1 (Core エディションを除く) • Microsoft Windows Server 2012、2012 R2* (Core エディションを除く) • Microsoft Windows Server 2016* (Core エディションを除く) <p>Windows オペレーティングシステムで Rapid Recovery Core サービスを実行するには、.NET Framework 4.5.2 がインストールされている必要があります。また、* マークの付いている OS には、ASP .NET 4.5x の役割または機能が必要です。Core をインストールまたはアップグレードすると、インストーラは Core サーバの OS に基づいてこれらのコンポーネントを確認し、必要に応じて、自動的にコンポーネントをインストールまたはアクティブ化します。</p> <p>他に記載がない限り、Rapid Recovery Core ではリストにある Windows OS のすべての x64 エディションがサポートされます。Rapid Recovery Core では Windows Server Core エディションはサポートされません。</p> <p>リストのオペレーティングシステムに Service Pack が指定されている場合 (Windows 7 SP1 など) は、指定された Service Pack をインストールした OS が最低要件になります。リストのオペレーティングシステムに Service Pack が指定されていない場合 (Windows 8 など) は、ベースのオペレーティングシステムがサポートされます。明示的に除外されていない限り、リストの OS に後続する SP もサポートされます。</p> <p>最適なパフォーマンスを得るためには、Windows 8.1 以降または Windows Server 2012 以降などの、より最新のオペレーティングシステムに Rapid Recovery Core をインストールすることをお勧めします。</p>
アーキテクチャ	64 ビットのみ
メモリ	<p>8GB 以上の RAM</p> <p>確実に Rapid Recovery Core サーバの最適なパフォーマンスを得るために、Error Checking & Correction (ECC) メモリの使用を強くお勧めします。</p>
プロセッサ	クアッドコア以上
ストレージ	<p>使用するリポジトリは、ダイレクトアタッチストレージ (DAS)、ストレージエリアネットワーク (SAN)、またはネットワーク接続ストレージ (NAS) デバイス (優先度順に列挙) に配置することをお勧めします。</p> <p>i NOTE: NAS にインストールする場合、リポジトリのサイズは 6 TB を上限とすることをお勧めします。どのストレージデバイスも、最低限の入力 / 出力要件を満たしている必要があります。ハードウェア、ソフトウェア、メモリ、ストレージ、およびネットワーク要件のサイジングに関する詳細については、Quest のナレッジベースの記事 185962 「Sizing Rapid Recovery Deployments」 (Rapid Recovery の展開におけるサイジング) を参照してください。</p>
ネットワーク	1 ギガビット Ethernet (GbE) 以上

要件	詳細
	<p>i NOTE: 堅牢な環境が求められる場合は 10 GbE のネットワークを使用することをお勧めします。</p>
ネットワーク ハードウェア	<p>想定帯域幅での通信を実現するには、適切な規格のネットワークケーブルを使用してください。</p> <p>i NOTE: お使いのネットワークのパフォーマンスを定期的にテストし、それに応じてお使いのハードウェアを調整することをお勧めします。</p>

Rapid Recovery Agent のソフトウェア要件

次の表では、Rapid Recovery Agent のソフトウェア要件を記載しています。

i **NOTE:** Add-on for Kaseya では、Rapid Recovery Agent は Linux オペレーティングシステムがインストールされているマシンに導入できません。アドオンを使用する場合、Linux マシンに Agent を手動でインストールする必要があります。詳細については、『*Rapid Recovery User Guide*』（Rapid Recovery ユーザーガイド）を参照してください。

表 18. Rapid Recovery Agent のソフトウェア要件

次の表では、最初の列に Agent ソフトウェアの要件（オペレーティングシステム、アーキテクチャ、メモリ、プロセッサ、Exchange Server、SQL Server、SharePoint、ストレージ、ネットワーク、ネットワークハードウェアなど）を示します。また、2 番目の列に、それぞれの詳細を示します。

要件	詳細
オペレーティングシステム	<p>Rapid Recovery Agent ソフトウェアは、次のような 32 ビット / 64 ビットの Windows および Linux オペレーティングシステムをサポートしています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Microsoft Windows Vista SP2 • Microsoft Windows 7 SP1 • Microsoft Windows 8、8.1* • Microsoft Windows 10 • Microsoft Windows Server 2008 SP2, 2008 R2 SP1 (Windows Server 2008 Core を除くすべてのエディション) • Microsoft Windows Server 2012、2012 R2* • Microsoft Windows Server 2016* • Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 6.3、6.4、6.5、6.6、6.7、6.8、7.0、7.1、7.2、7.3 • CentOS Linux 6.3、6.4、6.5、6.6、6.7、6.8、7.0、7.1、7.2、7.3 • Oracle Linux 6.3、6.4、6.5、6.6、6.7、6.8、7.0、7.1、7.2、7.3 • Debian Linux 7、8 • Ubuntu Linux 12.04 LTS、12.10、13.04、13.10、14.04 LTS、14.10、15.04、15.10、16.04 LTS • SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 (SP2 以降)、12

i **NOTE:** Windows オペレーティングシステムで Rapid Recovery Agent サービスを実行するには、Microsoft .NET Framework バージョン 4.5.2 がインストールされている必要があります。上記のリストで * が付いているオペレーティングシステムには、ASP .NET 4.5.x の役割または機能が必要です。Rapid Recovery Agent ソフトウェアをインストールまたはアップグレードすると、インストーラはこれらのコンポーネントを確認し、必要に応じて、自動的にコンポーネントをインストールまたはアクティブ化します。

その他のオペレーティングシステムでは、エージェントレス保護のみがサポートされています。詳細については、「[Rapid Snap for Virtual のエージェントレス保護](#)」を参照してください。

リストのオペレーティングシステムに Service Pack が指定されている場合 (Windows 7 SP1 など) は、指定された Service Pack をインストールした OS が最低要件になります。リストのオペレーティングシステムに Service Pack が指定されていない場合 (Windows 8 など) は、ベースのオペレーティングシステムがサポートされます。明示的に除外されていない限り、リストの OS に後続する SP もサポートされます。

Rapid Recovery Agent ソフトウェアは、Windows Server 2008 R2、Windows Server 2012、Windows Server 2012 R2、および Windows Server 2016 の Windows Server Core エディションのインストールをサポートしています。Windows Server 2008 R2 Core の場合のみ、SP1 以降が必要です。Windows Server 2008 Core エディションはサポートされていません。

Rapid Recovery Agent ソフトウェアは、上記のリストに記載された Linux ディストリビューションをサポートしています。リリースされたほとんどのカーネルバージョンでテスト済みです。サポートされているファイルシステムは、ext2、ext3、ext4、および xfs です。また、BTRFS もサポートされます (バージョン 4.2 以降のカーネルを使用する特定の Linux オペレーティングシステムのみ)。詳細については、「[Rapid Recovery リリース 6.1 のオペレーティングシステムのインストールと互換性対照表](#)」を参照してください。

Microsoft Hyper-V Server 2012 でインストールされた Agent は、Windows Server 2012 のコアエディションモードで動作します。

i **NOTE:** クラスタ共有ボリュームのネイティブバックアップは、Windows 2008 R2 (SP2 以降) の保護対象マシンでのみサポートされます。

アーキテクチャ 32 ビットまたは 64 ビット

メモリ 4GB 以上

プロセッサ シングルプロセッサまたはそれ以上

Microsoft Exchange Server Support Microsoft Exchange Server 2007 SP1 ロールアップ 5 以降、Exchange Server 2010、Exchange Server 2013、または Exchange Server 2016

Microsoft SQL Server Support Microsoft SQL Server 2008 以降

Microsoft SharePoint Server support **i** **NOTE:** 「SharePoint」のサポートとは、上記バージョンの Microsoft SharePoint Server の完全ライセンス版に適用されます。

ストレージ ダイレクト接続ストレージ、ストレージエリアネットワークストレージ、またはネットワーク接続ストレージ

要件	詳細
ネットワーク	<p>1ギガビット Ethernet (GbE) 以上</p> <p>i NOTE: 堅牢な環境が求められる場合は 10 GbE のネットワークを使用することをお勧めします。</p> <p>WAN (広域ネットワーク) 経由でマシンを保護することはお勧めしません。複数のネットワークを持つサイトがある場合は、各サイトに Core をインストールすることをお勧めします。情報を共有するには、別々の場所にある Core 間でレプリケーションを実行できます。Core 間のレプリケーションは WAN での使用に最適化されています。データ転送中は、データが圧縮、重複排除、および暗号化されます。</p>
ネットワーク ハードウェア	<p>想定帯域幅での通信を実現するには、適切な規格のネットワークケーブルを使用してください。</p> <p>i NOTE: お使いのネットワークのパフォーマンスを定期的にテストし、それに応じてお使いのハードウェアを調整することをお勧めします。</p>

Rapid Recovery Local Mount Utility ソフトウェアの要件

Local Mount Utility (LMU) は、Rapid Recovery に含まれています。LMU インストーラは、Core Console または Rapid Recovery の [ライセンスポータル](#) のどちらのダウンロード ページからでも入手できます。

表 19. Local Mount Utility ソフトウェアの要件

要件	詳細
オペレーティングシステム	<p>Rapid Recovery Local Mount Utility ソフトウェアは、次のような 32 ビットおよび 64 ビットの Windows オペレーティングシステムをサポートしています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Microsoft Windows Vista SP2 • Microsoft Windows 7 SP1 • Microsoft Windows 8、8.1* • Microsoft Windows 10 • Microsoft Windows Server 2008 SP2、2008 R2 SP1 (Windows Server 2008 Core および Windows Server 2008 R2 Core を除くすべてのエディション) • Microsoft Windows Server 2012、2012 R2* • Microsoft Windows Server 2016* <p>i NOTE: Windows オペレーティングシステムで Local Mount Utility サービスを実行するには、Microsoft .NET Framework バージョン 4.5.2 がインストールされている必要があります。上記のリストで * が付いているオペレーティングシステムには、ASP .NET 4.5.x の役割または機能が必要です。LMU をインストールまたはアップグレードすると、インストーラはこれらのコンポーネントを確認し、必要に応じて、自動的にコンポーネントをインストールまたはアクティブ化します。</p> <p>リストのオペレーティングシステムに Service Pack が指定されている場合 (Windows 7 SP1 など) は、指定された Service Pack をインストールした OS が最低要件になります。リストのオペレーティングシステムに Service Pack が指定されていない場合</p>

要件	詳細
	<p>(Windows 8 など) は、ベースのオペレーティングシステムがサポートされます。明示的に除外されていない限り、リストの OS に後続する SP もサポートされます。</p> <p>LMU ソフトウェアは、Windows Server 2012、Windows Server 2012 R2、および Windows Server 2016 の Windows Server Core エディションのインストールをサポートしています。Windows Server 2008 Core エディションおよび Windows Server 2008 R2 Core エディションはサポートされていません。</p>
アーキテクチャ	32 ビットまたは 64 ビット
メモリ	4GB 以上
プロセッサ	シングルプロセッサまたはそれ以上
ネットワーク	1 ギガビット Ethernet (GbE) 以上
	<p>i NOTE: 堅牢な環境が求められる場合は 10 GbE のネットワークを使用することをお勧めします。</p>
ネットワーク ハードウェア	<p>想定帯域幅での通信を実現するには、適切な規格のネットワークケーブルを使用してください。</p> <p>i NOTE: お使いのネットワークのパフォーマンスを定期的にテストし、それに応じてお使いのハードウェアを調整することをお勧めします。</p>

Rapid Snap for Virtual のエージェントレス保護

Rapid Recovery の Rapid Snap for Virtual 機能を使用すると、各ゲストマシンに Rapid Recovery Agent をインストールせずに特定のハイパーバイザプラットフォーム上の仮想マシン (VM) を保護することができます。

Hyper-V ハイパーバイザプラットフォームでこの機能を使用する場合は、Agent を Hyper-V ホストにインストールするだけで済みます。VMware ESXi でこの機能を使用する場合は、ESXi ホストはネイティブ API を使用してゲストマシンまで保護を拡張します。

Agent ソフトウェアを各 VM にインストールする必要がなくなるため、業界でこの機能はエージェントレス保護として知られています。Hyper-V の場合、この機能はホストベース保護とも呼ばれます。

Rapid Snap for Virtual には、いくつかの利点と制限事項があります。たとえば、ダイナミックボリューム (スパンボリューム、ストライプボリューム、ミラーボリューム、または RAID ボリュームなど) では、ボリュームレベルのスナップショットを作成できませんただし、ディスクレベルで、ダイナミックボリュームのスナップショットを作成できます。この機能を使用する前に、利点と制限事項の両方について理解しておいてください。詳細については、『*Rapid Recovery User Guide*』 (Rapid Recovery ユーザーガイド) の「Understanding Rapid Snap for Virtual」 (Rapid Snap for Virtual について) のトピックを参照してください。

エージェントレス保護またはホストベース保護を使用している場合は、お使いの VM で、ベースオペレーティングシステム、RAM、ストレージ、およびネットワークインフラストラクチャについて、Rapid Recovery Agent ソフトウェアがインストールされた保護対象マシンと同じ最小要件を満たす必要があります。詳細については、「[Rapid Recovery Agent のソフトウェア要件](#)」のトピックを参照してください。

その他のオペレーティングシステムのエージェントレスサポート

Rapid Recovery リリース 6.x は Microsoft .NET Framework バージョン 4.5.2 を使用しますが、.NET Framework バージョン 4.5.2 は Windows XP SP3、Windows Vista (SP2 以前)、Windows Server 2003、Windows Server 2008 ではサポートされていません。これらのオペレーティングシステムを搭載したマシンを以前の Core バージョン (AppAssure Core 5.4.3 など) で保護していた場合は、対応するバージョンの AppAssure Agent (以前の .NET バージョンを使用) がサポートされていました。

これらの Rapid Recovery Core の保護対象マシンは、以前の Agent バージョンを使用することで継続して保護することが可能です。

ただし、これらのオペレーティングシステムを搭載する保護対象マシンは、Rapid Recovery Agent リリース 6.x にアップグレードできません。

けれども、これらの Windows オペレーティングシステムを搭載したマシンは、次のいずれかの方法を使用して Rapid Recovery リリース 6.x Core で保護することができます。

- エージェントレス保護を使用して VMware ESXi ホスト上の仮想マシンを保護する。
- 保護対象の物理マシンまたは仮想マシンに、問題なく動作する以前のバージョンの Agent をインストールして実行する。リリース 6.0.2 の場合、これらの OS でサポート対象となる利用可能な Agent のバージョンは、AppAssure Agent 5.4.3 です。

VMware ESXi 環境は、Quest がサポートしない一部のオペレーティングシステムでも問題なく動作することがあります。たとえば、Windows XP SP3、Windows Vista (SP2 以前)、Windows Server 2003、および Windows Server 2008 はすべて Microsoft のサポートが終了しています。

動作テストでは、すべての範囲の Rapid Recovery の機能 (バックアップ、リストア、レプリケーション、およびエクスポート) が、これら特定のオペレーティングシステム上でも適切に機能しました。

ただし、これらのオペレーティングシステムを使用する場合は自己責任となります。Quest のサポートでは、これらのサポートが終了しているオペレーティングシステムや、Rapid Recovery Agent でサポートされないとリストに示されたオペレーティングシステムで発生した不具合の解決をサポートできません。

Rapid Snap for Virtual (エージェントレス保護) のサポートの制限事項

サポート対象のオペレーティングシステムのリストについては、「[Rapid Recovery リリース 6.1 のオペレーティングシステムのインストールと互換性対照表](#)」を参照してください。Core またはその Agent では、各々に対して、既知のすべての制限事項がこれらのマトリックスに含まれているか、またはソフトウェア要件表に注意事項として記載されています。不具合によって特定の機能を一時的に使用できない場合、この情報は通常どの特定のバージョンにおいてもリリースノートで報告されます。どのソフトウェアバージョンをインストールする場合においても、システム要件とリリースノートを確認することを強く推奨します。

Quest では、サポートされていないオペレーティングシステムを使用したテストを、完全には行っておりません。エージェントレス保護を使用して Rapid Recovery Agent ソフトウェアでサポートされていない OS がインストールされた仮想マシンを保護する場合は、自己責任でのご利用となります。いくつかの制限事項が適用される場合があることに、ユーザーは注意してください。これらの制限事項には、次のような事項が挙げられます。

- 仮想エクスポートが実行できない (1 回のみ、または継続的に)
- アーカイブに保存できない、またはアーカイブから復元できない
- ベアメタルリストアを使用してシステムボリュームを復元できない

たとえば、Agent を使用せずに Windows 95 を搭載したマシンを保護する場合、Hyper-V への仮想エクスポートを実行しようすると失敗します。この不具合は、古いオペレーティングシステムでは Hyper-V のサポートに制限があることが要因です。

特定の問題を報告するには、Quest のサポート担当者に連絡してください。ご報告いただいたそのような問題は、Quest のナレッジベースの記事に個別の動作不具合の問題として記載されるか、または今後の工ディションにリリースノートとして記載される場合があります。

ハイパーバイザの要件

ハイパーバイザは、ホストコンピュータ上で仮想マシン (ゲスト) を作成および実行します。各ゲスト OS には、それぞれのオペレーティングシステムがあります。

Rapid Recovery の仮想エクスポート機能を使用すると、1 回限りの仮想エクスポートを実行することができます。また、仮想スタンプとして知られている以降の仮想エクスポートの要件を定義することも可能です。このプロセスは、物理または仮想に関わらず、どの保護対象マシンからも実行することができます。保護対象マシンがダウンしても、仮想マシンを起動して動作をリストアしてから、リカバリを実行できます。

Rapid Recovery では、次の表に記載された VM ホストに仮想エクスポートを実行することができます。

表 20. 仮想エクスポートをサポートするハイパーバイザの要件

次の表に、ハイパーバイザの要件をリストします。最初の列に仮想マシンのホスト、ゲスト OS、ストレージ、およびアーキテクチャの各要件を示します。2 番目の列には各要件の詳細を記載します。

要件	詳細
仮想マシンのホスト	<p>VMware :</p> <ul style="list-style-type: none">VMware Workstation 7.0、8.0、9.0、10、11、12ESXi 5.0、5.1、5.5、6.0、6.5 上の VMware vSphere <p>i NOTE: サポートされている最新の VMware バージョンで実行することをお勧めします。デルのソフトウェアの今後の主なリリースでは、ESXi 5.0 および 5.1 がサポートされなくなる予定です。</p> <p>i NOTE: セキュアブートは、ESXi 6.5 の新機能です。Rapid Recovery でこの機能のサポートは、近い将来に計画されています。現時点では、ソースマシンでセキュアブートオプションを使用している場合、Rapid Recovery は vCenter/ESXi 6.5 への仮想エクスポートをサポートしていません。</p> <p>Microsoft Hyper-V :</p> <p>i NOTE: 任意の Hyper-V ホストに仮想エクスポートするには、.NET 4.5.2 および .NET 2.0 が Hyper-V ホストにインストールされている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none">第 1 世代 :<ul style="list-style-type: none">Microsoft Server のバージョン 2008 SP2、2008 R2 SP1、2012、2012 R2、2016 で実行されている Hyper-VHyper-V 機能付きの Microsoft Windows 8、8.1、および Windows 10 実行されている Hyper-V第 2 世代 :<ul style="list-style-type: none">Microsoft Server 2012 R2、2016 で実行されている Hyper-VMicrosoft Windows 8.1、Windows 10 で実行されている Hyper-V <p>i NOTE: 次の Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) オペレーティングシステムを使用している保護対象マシンのみが、第 2 世代 Hyper-V ホストへの仮想エクスポートをサポートしています。</p> <ul style="list-style-type: none">Windows 8 (UEFI)Windows 8.1 (UEFI)Windows Server 2012 (UEFI)Windows Server 2012 R2 (UEFI)Windows Server 2016 (UEFI) <p>NOTE: Hyper-V ホストで、エクスポートを実行するために割り当てられている RAM が十分でない場合は、Hyper-V generation 2 の VM への Hyper-V エクスポートは失敗する可能性があります。</p> <p>Oracle VirtualBox :</p> <ul style="list-style-type: none">VirtualBox 4.2.18 以降
ゲスト (エクスポートされた) オ	<p>2 TB 以下のボリュームの場合 2 TB 以下のボリュームの保護に関し、VM (ゲスト) は「Rapid Recovery Agent のソフトウェア要件」のトピックで説明されているサ</p>

要件	詳細
オペレーティングシステム	<p>ポート対象オペレーティングシステムと同じオペレーティングシステムを使用できます。</p> <p>2 TB を超えるボリュームの場合 2 TB を超える保護対象ボリュームを持つシステムで仮想エクスポートを実行する場合は、Windows 2012 R2、Windows Server 2016、VMware ESXi 5.5、または VMware ESXi 6.0 を使用します。ホストが仮想ハードディスク (VHD) に接続できないため、以前のオペレーティングシステムはサポートされていません。</p> <p>第 1 世代および第 2 世代 Hyper-V の VM は、どちらもサポートされています。</p> <p>i NOTE: すべてのハイパーバイザで、すべてのオペレーティングシステムがサポートされるわけではありません。</p>
ストレージ	<p>ホストに予約されているストレージ容量は、ゲスト VM 内のストレージサイズと等しいか、またはそれよりさらに大きい必要があります。</p>
アーキテクチャ	32 ビットまたは 64 ビット

Rapid Recovery では、ゲストごとに Rapid Recovery Agent ソフトウェアをインストールせずに VM ホストを保護できます。これは、エージェントレス保護と呼ばれます。エージェントレス保護の例外を含む詳細については、『*Rapid Recovery User Guide*』（Rapid Recovery ユーザーガイド）の「Understanding Rapid Snap for Virtual」（Rapid Snap for Virtual について）のトピックを参照してください。

エージェントレス保護は、次の表で説明されているとおりにサポートされます。

表 21. エージェントレス保護またはホストベース保護をサポートするハイパーバイザの要件

次の表では、エージェントレス（またはホストベース）保護に固有のハイパーバイザの要件を示します。最初の列に仮想マシンのホスト、OS、ストレージ、およびアーキテクチャの各要件を示します。2 番目の列には各要件の詳細を記載します。

要件	詳細
仮想マシンのホスト	<p>VMware :</p> <ul style="list-style-type: none"> ESXi 5.0 (ビルド 623860 以降)、5.1、5.5、6.0、6.5 上の VMware vSphere 各ゲストには、最新の VMware Tools をインストールしてください。 <p>i NOTE: vSphere/ESXi バージョン 6.5 を使用したエージェントレスの保護には、以下の制限が適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> セキュアブートは、ESXi 6.5 の新機能です。Rapid Recovery でのこの機能のサポートは、近い将来に計画されています。現時点では、ソースマシンでセキュアブートオプションを使用している場合、Rapid Recovery は vCenter/ESXi 6.5 への仮想エクスポートをサポートしていません。 ESXi 6.5 で、暗号化された VM のサポートが導入されました。ただし、この機能には、仮想ディスク開発キット (VDDK) バージョン 6.5 が必要です。エージェントレス保護用の VDDK 6.5 のサポートは、Rapid Recovery バージョン 7.0.0 以降で計画されています。この変更まで、Rapid Recovery による、ESXi バージョン 6.5 以降での暗号化された VM のエージェントレスの保護はサポートされません。 転送モードが SAN (ストレージエリアネットワーク) に設定されている場合、ESXi 6.5 上でエージェントレスで保護された VM の転送は機能しません。



NOTE: サポートされている最新の VMware バージョンで実行することを強くお勧めします。デルのソフトウェアの今後の主なリリースでは、ESXi 5.0 および 5.1 がサポートされなくなる予定です。

Microsoft Hyper-V :

- Windows Server 2012 R2
- Windows Server 2016
- Windows 8 x64
- Windows 8.1 x64
- Windows 10 x64

オペレーティングシステム

ボリュームレベルの保護用に、ゲスト VM は GPT または MBR パーティションテーブルを持っている必要があります。他のパーティションテーブルが見つかった場合、保護はボリュームレベルではなく、ディスクレベルで開始されます。

ストレージ

ホストに予約されているストレージ容量は、ゲスト VM 内のストレージサイズと等しいか、またはそれよりさらに大きい必要があります。

アーキテクチャ

32 ビットまたは 64 ビット

DVM リポジトリの要件

Deduplication Volume Manager (DVM) リポジトリを作成する場合は、配置場所にローカルストレージボリュームまたは Common Internet File System (CIFS) の共有場所にあるストレージボリュームを指定できます。Core サーバでリポジトリをローカルに作成する場合は、リソースを状況に応じて割り当てる必要があります。

DVM リポジトリは、プライマリストレージデバイスに保存する必要があります。Data Domain のようなアーカイブ用のストレージデバイスは、パフォーマンスの制限のためサポートされていません。同様に、リポジトリはクラウドに階層化された NAS ファイラに保存しないようにします。これらのデバイスをプライマリストレージとして使用すると、パフォーマンスが制限される傾向があるためです。

使用するリポジトリは、ダイレクトアタッチストレージ (DAS)、ストレージエリアネットワーク (SAN)、またはネットワーク接続ストレージ (NAS) デバイスに配置することをお勧めします。これらは、優先度が高い順にリストされています。NAS にインストールする場合、リポジトリのサイズは 6 TB を上限とすることをお勧めします。どのストレージデバイスも、最低限の入力 / 出力要件を満たしている必要があります。これらの要件や、お使いのハードウェア、ソフトウェア、メモリ、ストレージ、およびネットワーク要件のサイジングについては、以下で参考文献として挙げられている『*Rapid Recovery Sizing Guide*』 (Rapid Recovery サイジングガイド) を参照してください。

DVM リポジトリを作成する場合は、ボリューム上でリポジトリのサイズを指定する必要があります。各 DVM リポジトリは、最大 4,096 リポジトリのエクステンツ (追加のストレージボリューム) をサポートします。

クラスタ共有ボリューム (CSV) への Rapid Recovery Core または Core 用リポジトリのインストールはサポートされていません。

サポート対象の物理ホストまたは仮想ホストにあるボリュームであれば、複数の DVM リポジトリをインストールすることができます。インストーラでは DVM リポジトリのサイズを決定します。



NOTE: オンデマンドまたはスケジューリング設定されたレポートを生成して、お使いのリポジトリのサイズや正常性を監視することができます。リポジトリレポートの生成については、『*Rapid Recovery User Guide*』 (Rapid Recovery ユーザーガイド) の「Generating a report from the Core Console」 (Core Console からのレポートの生成) のトピックを参照してください。

必ず専用のフォルダまたはディレクトリでリポジトリを作成するようにし、ボリュームの root フォルダには作成しないようにします。たとえば、ローカルパスにインストールする場合は、D:\ではなく D:\Repository\を使用します。データとメタデータには、それぞれ個別のディレクトリを作成することをお勧めします。たとえば、D:\Repository\Data や D:\Repository\Metadata などを作成します。

Rapid Recovery 使用の詳細については、『*Rapid Recovery User Guide*』（Rapid Recovery ユーザーガイド）を参照してください。Rapid Recovery のライセンス管理の詳細については、『*Rapid Recovery License Portal User Guide*』（Rapid Recovery ライセンスポータルユーザーガイド）を参照してください。ハードウェア、ソフトウェア、メモリ、ストレージ、およびネットワーク要件のサイジングについては、ナレッジベースの記事 185962 『*Sizing Rapid Recovery Deployments*』（Rapid Recovery の展開におけるサイジング）で参考文献として挙げられている『*Rapid Recovery Sizing Guide*』（Rapid Recovery サイジングガイド）を参照してください。

ライセンス要件

Rapid Recovery のコンポーネントをインストールする前に、Rapid Recovery ライセンスポータルで登録を行い、アカウントを作成して、ライセンスキーまたはライセンスファイルを取得する必要があります。このライセンスキーまたはライセンスファイルは、Rapid Recovery Core と Rapid Recovery Agent ソフトウェアをダウンロードして、マシンを設定および保護するために必要です。ライセンスポータルで Core を登録するには、サーバがインターネットに接続しており、ライセンスポータルに定期的にチェックインできる必要があります。

Rapid Recovery ライセンスポータル、ライセンスキーの取得、およびアカウント登録の詳細については、『*Rapid Recovery License Portal User Guide*』（Rapid Recovery ライセンスポータルユーザーガイド）を参照してください。

Quest のサポートポリシー

有効なサポート契約を結んでいるお客様の場合、最新のメンテナンスリリースにパッチを適用すると、現在のメジャー/マイナーリリースについて電話または電子メールによるサポートを受けられます。これらのリリースは N とも呼ばれています。Quest では N-1 と N-2 も完全にサポートしています。中間バージョンには、限定サポートが提供されます。

Quest は自社製品のライフサイクル (PLC) のサポートポリシーをサポート Web サイトで説明しています (<https://support.quest.com/rapid-recovery/> を参照してください。 **Policies & PLC**, (ポリシーと PLC) をクリックして、 **Software Product Support Lifecycle Policy** (ソフトウェア製品サポートライフサイクルポリシー) を展開します)。フルサポート、限定サポート、および停止されたサポートの詳細については、上記ポリシーを参照してください。

製品ライセンス

Rapid Recovery、AppAssure、または Quest DL シリーズのバックアップおよびリカバリアプライアンスソフトウェアの任意のバージョンを使用および管理するには、次の 2 つのものがが必要です。

- **Rapid Recovery ライセンスポータルのアカウント。**

ライセンスポータルのアカウントは無料です。新規ユーザーの方は、<https://licenseportal.com> で登録してください。登録する際は、Quest の営業担当のファイルに記録されているメールアドレスを使用します。試用版からアップグレードする場合は、その試用版に関連付けられているメールアドレスを使用します。別のメールアドレスを使用する必要がある場合は、Quest の営業担当に連絡してサポートを受けてください。



NOTE: このライセンスポータルは、最近再ブランド化されました。AppAssure または Rapid Recovery で使用するライセンスポータルアカウントを以前に登録している場合は、そのアカウント情報を使用します。以前のライセンスポータルユーザーの方は、Rapid Recovery 用に新しいアカウントを登録する必要はありません。

ライセンスポータルの詳細については、『*Rapid Recovery License Portal User Guide*』（Rapid Recovery ライセンスポータルユーザーガイド）を参照してください。このガイドは[マニュアルサイト](#)から入手できます。

- **ソフトウェアライセンス。**Rapid Recovery の使用にはライセンスが必要です。有効期間に制限がある試用版ライセンスか、長期（非試用版）ライセンスを使用できます。試用版ライセンスの期間が切れると、有効な長期ライセンスを取得して登録するまで、Rapid Recovery Core はスナップショットの作成を停止します。

Rapid Recovery の試用版を登録すると、すぐに使用できる試用版ライセンスでインストーラが設定されます。試用版ライセンスは 14 日間有効ですが、グループ管理者は 1 回に限りライセンスの試用期間を 28 日に延長できます。

DL バックアップおよびリカバリアプライアンスを購入した場合、アプライアンスで Core を初めて起動すると自動的にアクティブになる 30 日間の一時ライセンスでアプライアンスが設定されます。

ソフトウェアまたは DL アプライアンスを購入すると、電子メール経由で長期的な（非試用版）ライセンスファイルまたはライセンスナンバーを受信します。販売注文時に指定した場合、ライセンスはエンドユーザーのメールアドレスに送信されます。それ以外の場合、長期間なライセンスは販売注文時の連絡用メールアドレスに送信されます。

試用版ライセンスを有効にするには：

試用版に登録すると、試用版ライセンスが Rapid Recovery Core ソフトウェアインストーラに書き込まれます。ライセンスポータルのアカウントにログインするだけで、Rapid Recovery Core ソフトウェアをダウンロードできます。「」をよく読んでから、Rapid Recovery Core をインストールしてください。マシンの保護とバックアップをすぐに開始できます。

購入した商用ソフトウェアライセンスを有効にするには（試用版ライセンスなし）：

ソフトウェアライセンスを購入し、試用版ライセンスで起動しなかった場合、Rapid Recovery Core のインストール後に Core Console でライセンス入力を求めるプロンプトが表示されます。ライセンス番号を入力するか、販売注文時にメールで提供されたライセンスファイルを検索して参照します。詳細については、ライセンスのアップデートまたは変更のトピック（『*Rapid Recovery User Guide*』（Rapid Recovery ユーザーガイド））を参照してください。

試用版 DL アプライアンスライセンスを有効にするには：

各 Quest DL シリーズアプライアンスには、アプライアンスで Core を初めて起動すると自動的にアクティブになる 30 日間のライセンスが含まれます。

試用版ライセンスをアップグレードするには：

中断されないバックアップを行う場合は、試用版の有効期間が終了する前に、長期ライセンスにアップグレードします。試用版ライセンスの期間が切れると、Rapid Recovery Core はスナップショットの作成を停止します。ライセンスの不足によって中断したバックアップを再開するには、長期ライセンスを取得し Core Console にライセンス情報を入力します。

Core が猶予期間後 20 日間ライセンスポータルに接続しない場合、ライセンスプールから自動的に削除されます。その後 Core がライセンスポータルに接続した場合、ライセンスポータル上で自動的に復元されます。

ライセンスのアップグレードを要求するには、<https://www.quest.com/register/95291/>にある Contact Sales の Web フォームに必要事項を入力し、営業担当者に連絡してください。営業担当者を介して長期の Rapid Recovery ライセンスをアップグレードまたは購入すると、新しいライセンスキーまたはファイルが含まれたメールが送信されます。このライセンス情報を、Core Console に入力します。詳細については、ライセンスのアップデートまたは変更のトピック（『*Rapid Recovery User Guide*』（Rapid Recovery ユーザーガイド））を参照してください。

DL シリーズのバックアップおよびリカバリアプライアンスにライセンスを追加するには、ライセンスの追加のトピック（『*Rapid Recovery User Guide*』（Rapid Recovery ユーザーガイド））を参照してください。

Rapid Recovery を初めてご利用になる方へ

これらのトピックでは、Rapid Recovery を使用してデータ保護を開始するために利用できる情報を提供しています。

次のトピックで構成されています。

- [アップグレードとインストールの手順](#)
- [補足資料](#)

アップグレードとインストールの手順

Quest では、インストールまたはアップグレードの前に、『*Rapid Recovery Installation and Upgrade Guide*』（Rapid Recovery インストールおよびアップグレードガイド）をよく読んで理解しておくことをお勧めしています。特に、アップグレードを行う場合は、次の章のすべてのトピックをお読みください：Upgrading to Rapid Recovery（Rapid Recovery へのアップグレード）新規インストールの場合は、次の章のすべてのトピックをお読みください：Installing Rapid Recovery（Rapid Recovery のインストール）

また、Quest では、アップグレードを行う前に、各リリースのリリースノートと、そのリリースの「」をよくお読みいただくことをお勧めしています。このプロセスは、潜在的な問題を検知して予防するために役立ちます。リリースノートは各リリースのあらゆる製品文書の最後にアップデートされるので、アップデートされたシステム要件についてはリリースノートを参照してください。

AppAssure Core リリース 5.4.3、または Rapid Recovery Core リリース 6.0.x または 6.1.x からのアップグレードの場合は、お使いの Core サーバ上で最新の Core のインストーラソフトウェアを実行します。レプリケーションを使用している場合、ソース Core の前に必ずターゲット Core をアップグレードします。

Agent ソフトウェアを使用してマシンを保護する際に、AppAssure Core リリース 5.4.3、または Rapid Recovery Core リリース 6.0.x または 6.1.x からアップグレードを行う場合、保護する各マシン上で最新の Rapid Recovery Agent インストーラを実行します。詳細については、「[保護](#)」を参照してください。

Rapid Snap for Virtual 機能を使用して、サポートされるハイパーバイザープラットフォーム上の仮想マシンをエージェントレスで保護することもできます。重要な制限が適用されます。エージェントレス保護の利点と制限に関する詳細については、「[Rapid Snap for Virtual について](#)」のトピック（リリース 6.1 エディションの『*Rapid Recovery User Guide*』（Rapid Recovery ユーザーガイド））を参照してください。

Quest のソフトウェアポリシーでは、Rapid Recovery の 2 つ前のメジャー / マイナーリリースまでがサポートされます。古いバージョンをアップグレードする場合は、最初に完全にサポートされるリリース（Rapid Recovery Core リリース 6.0.2）にアップグレードするか、1 つ前のリリース（AppAssure Core リリース 5.4.3）にアップグレードすることをお勧めします。その後で、適切な Rapid Recovery ソフトウェアコンポーネントの 6.1.2 インストーラを実行できます。



NOTE: リリース 6.0.1 にはローカライズのサポートは含まれていませんでした。英語以外の言語にローカライズされた AppAssure 5.4.3 Core を実行している場合は、Rapid Recovery Core リリース 6.0.2 以降にアップグレードします。

詳細については、『*Rapid Recovery Installation and Upgrade Guide*』（Rapid Recovery インストールおよびアップグレードガイド）を参照してください。

保護対象の Linux マシンで AppAssure Agent から Rapid Recovery Agent バージョン 6.x にアップグレードする場合は、最初に AppAssure Agent をアンインストールする必要があります。詳細および固有の手順については、『*Rapid Recovery Installation and Upgrade Guide*』（Rapid Recovery インストールおよびアップグレードガイド）を参照してください。

Rapid Recovery Core ソフトウェアをダウンロードするには、[ライセンスポータル](#)でアカウントを登録している必要があります。登録が完了したら、ソフトウェアをダウンロードし、「」をよく読んでから、Rapid Recovery Core をインストールしてください。

ライセンス

Rapid Recovery Core の試用版には、仮のライセンスキーが含まれる場合があります。ライセンスキーは、中断されないバックアップ、レプリケーション、またはデータ復元の実行の際に必要になります。詳細については、次のリソースを参照してください。

- ライセンスキーに関する基本情報は、これらのリリースノートの「[製品ライセンス](#)」の項で参照できます。
- Rapid Recovery Core からのライセンス管理の詳細については、ライセンスの管理 のトピック (『*Rapid Recovery User Guide*』 (Rapid Recovery ユーザーガイド)) を参照してください。
- ライセンスの詳細については、『*Rapid Recovery License Portal User Guide*』 (Rapid Recovery ライセンスポータルユーザーガイド) を参照してください。

保護

物理または仮想マシン (VMware vSphere 上の VM を除く) を保護するには、Rapid Recovery Agent ソフトウェアをインストールする必要があります。Rapid Recovery Agent は、[ライセンスポータル](#) からダウンロードして、保護する各マシンにインストールできます。適切に設定された Rapid Recovery Core から、保護するマシンに Agent を展開することもできます。

VMware vSphere ホストを Core と保護対象のマシンで使用している場合は、多くの場合、Rapid Recovery Agent をインストールせずにマシンを保護するオプションがあります。エージェントレス保護を使用している場合は、いくつかの制限が適用されます (特に SQL Server と Exchange Server の場合)。これらの制限の詳細については、エージェントレス保護についてのトピック (『*Rapid Recovery User Guide*』 (Rapid Recovery ユーザーガイド)) を参照してください。

マシン保護 ウィザードまたは 複数のマシンの保護 ウィザードを使用して、Rapid Recovery Core に保護対象のマシンを追加します。



NOTE: クラスタを保護する前に、まずリポジトリを作成する必要があります。詳細については、DVM レポジトリの作成 のトピック (『*Rapid Recovery User Guide*』 (Rapid Recovery ユーザーガイド)) を参照してください。リポジトリはマシンを保護するために必要ですが、マシンを保護するためのワークフローの間にリポジトリを作成するためのオプションがあります。

補足資料

補足情報は次の場所で入手できます。

- [技術マニュアル](#)
- [ビデオとチュートリアル](#)
- [サポート技術情報](#)
- [テクニカルサポートフォーラム](#)
- [トレーニングと認定](#)
- [Rapid Recovery ライセンスポータル](#)

各国語対応

このセクションでは、本製品を英語以外の設定（たとえば、北米以外のお客様に必要となる設定）でインストールおよび運用するための情報を提示します。このセクションは、製品版ドキュメントの別の場所にあるサポート済みプラットフォームおよび設定に関する記述を置き換えるものではありません。

本リリースは、Unicode 対応で、任意の文字セットをサポートしています。本リリースでは、すべての製品コンポーネントで、同一または互換性のある文字エンコーディングを使用するように設定し、同一のロケールおよび地域オプションを使用するようにインストールする必要があります。このリリースは、以下の地域での運用に対応できるよう作成されています。北米、西ヨーロッパ、中南米、中央/東ヨーロッパ、極東アジア、日本。これは、双方向の書き込み（アラビア語とヘブライ語）をサポートしています。本リリースは、コンプレックススクリプト（中央アジア - インド、タイ）をサポートします。

このリリースは、以下の言語のローカライズ版が用意されています。中国語（簡体字）、フランス語、ドイツ語、日本語、韓国語、ポルトガル語（ブラジル）、スペイン語。

このリリースには、以下の既知の機能や制限が含まれます。

- Rapid Recovery には Microsoft .NET 4.5.2 Framework が必要です。AppAssure は以前の .NET バージョンを使用しました。利用可能なダウングレードオプションはありません。AppAssure から Rapid Recovery にアップグレードし、その後 AppAssure の以前のバージョンを使用する場合は、AppAssure の Core および Agent の新規インストールを実行する必要があります。
- Rapid Recovery のログとサポート技術情報の記事は、英語版のみです。
- Rapid Recovery Add-On for Kaseya は英語版のみです。
- 本リリースの技術製品のマニュアルは、英語版のみが提供されています。リリースノートについては、上記のすべての言語で提供されています。

Quest について

Quest は名前以上の存在です

Quest ではお客様のために IT をより強力にするための方法を追求しています。そのために、IT 管理に費やす時間を短縮し、ビジネス革新のためにより多くの時間をかけるためのコミュニティ主導のソフトウェアソリューションを構築しています。データセンターをモダナイゼーションしてクラウドに素早くアクセスできるようにし、データ駆動型ビジネスを成長させるために必要な専門知識、セキュリティ、アクセシビリティを提供します。革新の一部である Quest のグローバルコミュニティへの招待と、顧客満足度を確実にするため確固たるコミットメントを組み合わせることで、現在のお客様に真のインパクトを与え、Quest が誇るレガシーを残すソリューションを提供し続けています。Quest は新しいソフトウェア企業に変わることによって現在の状況に挑みます。お客様のパートナーとして、お客様の情報技術がお客様のために、お客様によって確実に構築されるようにするために、たゆまぬ努力を続けます。これが Quest のミッションです。このミッションに一丸となって取り組んでいます。新しくなった Quest によろこそ。Join the Innovation™ にご招待します。

私たちのブランド、ビジョンとともに。

Quest のロゴは、Quest の物語、革新、コミュニティ、サポートを表しています。この物語の重要な部分は、Q で始まります。この文字は完璧な円であり、技術の精度と強さへのコミットメントを表しています。Q の中の空間は、新たな Quest のコミュニティに加わる必要のある重要な部分、つまりお客様を象徴しています。

Quest へのお問い合わせ

セールスマタはその他のお問い合わせについては、<https://www.quest.com/company/contact-us.aspx> を参照するか、+ 1-949-754-8000 までお電話ください。

テクニカルサポート :

テクニカルサポートは、有効な保守契約と試用版を保有している Quest のお客様を対象としています。<https://support.quest.com> から Quest サポートポータルにアクセスできます。

サポートポータルには、問題を自主的にすばやく解決するために使用できるセルフヘルプツールがあり、24 時間 365 日ご利用いただけます。サポートポータルでは、次の操作が可能です。

- サービスリクエストの送信と管理
- サポート技術情報記事の参照
- 製品通知へのサインアップ
- ソフトウェアと技術マニュアルのダウンロード
- ハウツービデオの表示
- コミュニティディスカッションへの参加
- サポートエンジニアとのオンラインチャット
- 製品のサポートサービスの表示

Copyright © 2017 Quest Software Inc.

無断転載を禁じます。

本書には、著作権によって保護されている機密情報が記載されています。本書に記載されているソフトウェアは、ソフトウェアライセンスまたは機密保持契約に基づいて提供されます。本ソフトウェアは、当該契約の条項に準拠している場合に限り、使用または複製することができます。本書のいかなる部分も Quest Software Inc. の書面による許可なしに、購入者の個人的な使用以外の目的で、複写や記録などの電子的または機械的ないかなる形式や手段によっても複製または転送できません。

本書には、Quest Software 製品に関連する情報が記載されています。明示的、黙示的、または禁反言などを問わず、本書または Quest Software 製品の販売に関連して、いかなる知的所有権のライセンスも付与されません。本製品の使用許諾契約の契約条件に規定されている場合を除き、QUEST SOFTWARE はいかなる責任も負わず、製品に関連する明示的、黙示的または法律上の保証（商品性、特定の目的に対する適合性、権利を侵害しないことに関する黙示的保証を含む）を放棄します。いかなる場合も、本書の使用または使用できないことから生じる直接的、間接的、結果的、懲罰的、特殊的、偶発的損害（利益損失、事業中断、または情報損失の損害を含む）について、かかる損害の可能性を DELL が報告を受けたとしても、QUEST SOFTWARE は一切の責任を負わないものとします。Quest Software は、本書の内容の正確性または完全性について、いかなる表明または保証も行わず、通知なしにいつでも仕様および製品説明を改変する権利を有します。Quest Software は、本書の情報を更新する一切の義務を負いません。

本書の使用について質問がある場合は、下記までお問い合わせください。

Quest Software Inc., Attn:LEGAL Dept., 4 Polaris Way, Alisa Viejo, CA 92656.

支社および国際オフィスについては、弊社の Web サイト (<https://www.quest.com>) を参照してください。

特許

Quest Software は、自社の先進技術に誇りを持っています。特許および出願中の特許が本製品に適用される場合があります。本製品に適用される特許の最新の詳細については、弊社の Web サイト (<https://www.quest.com/legal>) を参照してください。

商標

Quest、Quest ロゴ、および Join the Innovation は、Quest Software Inc. の商標および登録商標です。Quest マークの完全なリストについては、<https://www.quest.com/legal/trademark-information.aspx> を参照してください。その他の商標および登録商標は、それぞれの所有者に帰属します。

凡例



CAUTION: 注意アイコンは、指示に従わないと、ハードウェアの損傷やデータの損失を招く可能性があることを示します。

- **WARNING:** 警告アイコンは、物的損害、けが、または死亡の原因となる可能性があることを示します。
- **IMPORTANT, NOTE, TIP, MOBILE, or VIDEO:** 情報アイコンは、サポート情報を示します。